

501

34

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

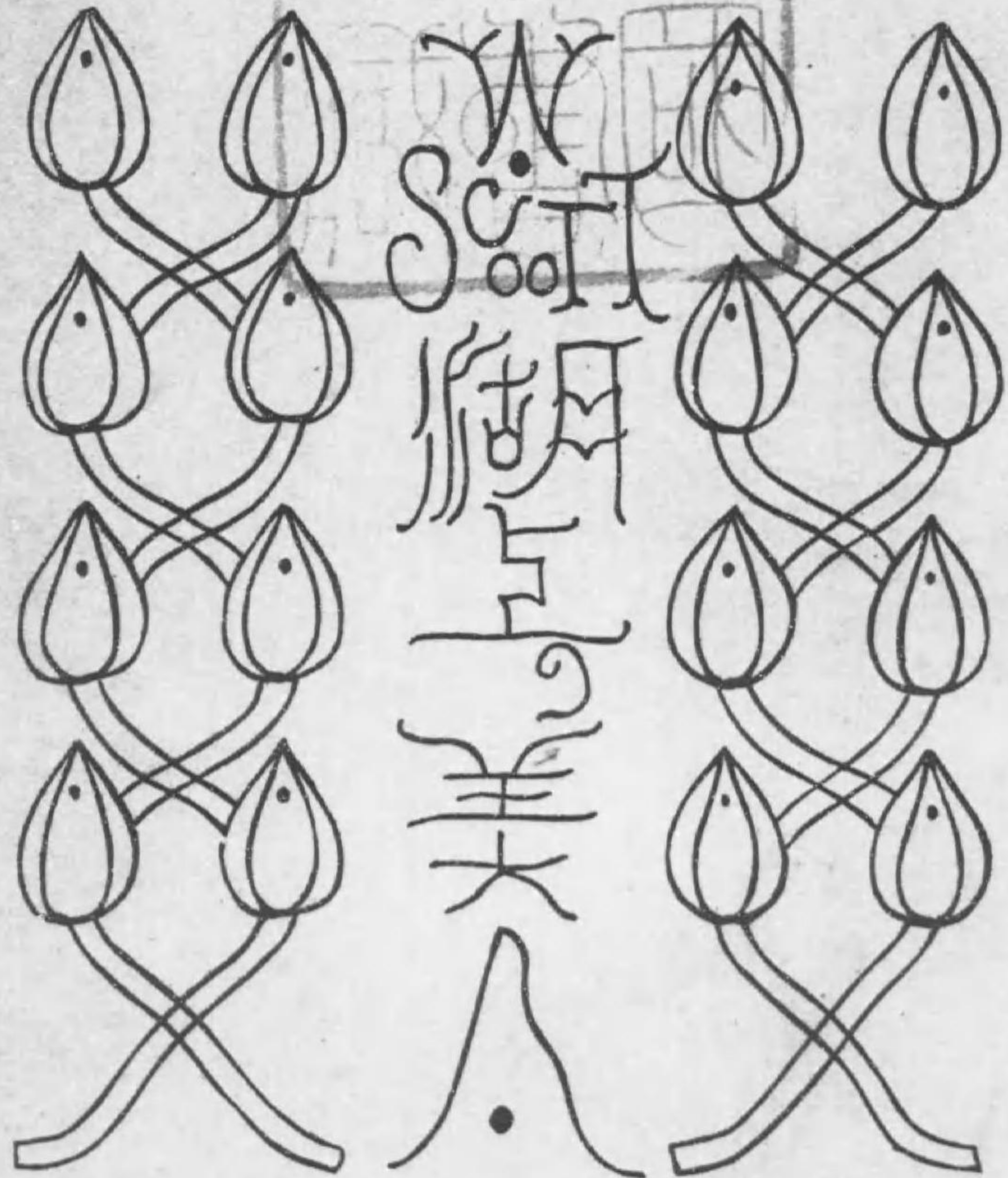
始





I 5L63

501-34



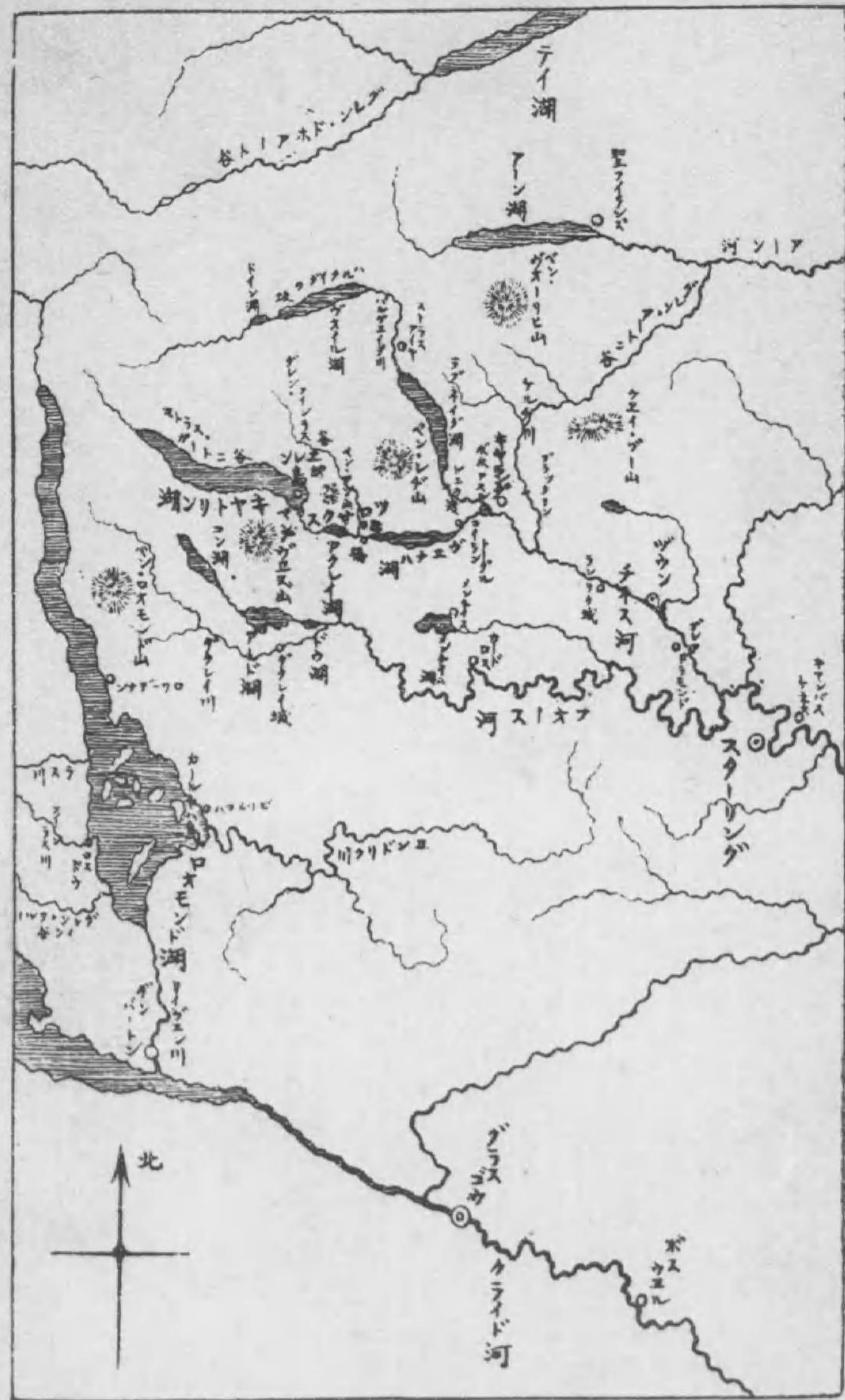


原 作 者 の 肖 像



*Sir Walter Scott*  
*C. R. Leslie, P. A.*





部一の州西スバ、ゲンリタス蘭格蘇  
圖の



## 譯者序

拙譯は元來一般の文學愛好者、殊に、最も興味深くして、しかも上品なる家庭の讀物たるんことを目的としてなつたものであるが、傍ら、初步の英文學研究者にも多少參考とならんことを期してゐる。

本篇が、作者の幾篇かの、所謂『ノットワカレ、ロマンス律語的傳奇物語』中で最も成功せるものであり、又彼の詩と小説とを通じて最も人氣あるものゝ一つである事は、今更云ふ迄もなく、更に英國の浪漫派文學中の一佳作として、英國の浪漫派文學の生命絶えざる限りは、本篇も永へに生命あるべきものであることは疑ふの餘地がない。これが初めて出た時に、當時の讀書社會に煮き起した評センセイレン判の如何に大であつたかは、當時の彼の出版人の述べし次ぎの事實を見て、よく判ると思ふ、——「これが世に現はるゝや、全英國は詩人に對する熱烈なる讚美の聲に湧き返り、幾多の人々は、それ迄は比較的一般世人に知られてゐなかつたキャト



リン湖地方(本篇の舞臺となれる所)の風光を賞美せんとして、吾れ先きにと其處に殺到し、しかも書物の出でし時は、恰かも旅行遠足の好季節に近づいてゐたために、その地方のあらゆる民家、あらゆる旅館は、陸續として訪れ来る遊子驛客に充滿し、また『湖上の美人』出版の日以來、蘇格蘭の驛馬の賃金が急に暴騰を來たし、その後、長い間同じ状態が繼續してゐた』程であると云つてゐるのを見ても、よく判ると思ふ。

偕て、譯文は大體直譯を主としたけれども、また屢々意譯や、自由譯によつたこともあり、同時に行ラインなども原文と一致してゐないことも時々ある。また譯語は、眞に原文に忠實ならんとすれば、雅語や、漢語を縦横に驅使した方が一層好いかも知れんが、譯者は成るべく現代の讀者にフワミリヤーならしめんがために、出來得る限り平易なる現代語を以て現はすこととし、古めかしい雅語や、拮屈聲牙なる漢語は努めて避くることにした。

云ふ迄もなく、翻譯の生命とする處は、それが原作者の偉大さや、原作品の——此處では主として形式上の——卓越さなど、全然切り離して、一個獨立の文學として見ても立派に價値あるものでなければならんと云ふ點にある。故に、それがためには單に原文の意味

を忠實に傳へたゞけでは勿論十分ではない、更に進んで、原文の内容、外形を通じて、その精神スピリットを完全に、或ひは出來得る限り完全に近く傳へなければならぬ。即ち、原文に含まれたる感情、氣分、力、美、調子、その他、原文の總ての特色が出來得る限り忠實に移植されてゐなければならぬのである。これ翻譯が、世人の想像以上に困難なる所以であつて、殊に詩の翻譯の場合に於いては、譯者をして屢々絶望せしめ、或ひは不可能をすら感ぜしめる所以であつて、詩の翻譯の極めて困難、或ひは不可能なる事に就いては、——一例を上げれば、——かの Oxford Lectures on Poetry の著者(A.C. Bradley 氏)の如きも、その巻頭の論文 Poetry for Poetry's Sake の中で、同様な意味のことを云つてゐる。——かく論じて來ると、何だか譯者は、己れがかゝる難事業の遂行者たるに最も適せるものと自任してゐるやうに見えるかも知れんけれども、勿論、譯者の眞意は斷じて其處にはない、唯だこれを機會に、——判り切つたことかは知らんが、——翻譯に就いて、聊か自己の理想と、翻譯——殊に詩の翻譯の至難なる事を述べて見たゞけであつて、譯者はこの理想に向つて進まんことを努めたけれども、固より淺學未熟なる、到底我が理想の百分の一をも



満たし得てゐないのを深く恥ぢ、且つ遺憾としてゐるのである。

### 原作者略傳

原作者スコット (Sir Walter Scott) は千七百七十一年八月十五日 (大奈翁が、曾て自分の誕生日なりと稱した日と同一なものも一奇だが) 蘇格蘭のエジンバラ市に生れた。父親は a writer to the signet (『訟師』——一種の辯護士) で、仲々綿密にして、勤勉なる事務家であり、母親はエジンバラ大學醫學部教授 (Dr. John Rutherford) の娘で、獨創力に富みたる、立派なる教養ある婦人で、詩人の文學的傾向は、母親の感化も又與つて力があつたと云はれてゐる。兎に角、父方から云つても、母方から云つても、詩人は國境 (蘇格蘭と英蘭との境界地方) の一番好い家柄に屬してゐた。未だ嬰兒であつた時、詩人はふとした熱病から、右足が——さまで烈しくはなかつたが——跛になつて、終世治らなかつた。これは彼——或ひは英國に取つては却つて大なる幸福であつたらう、若し彼が肉體的に健全なる人であつたならば、

恐らくあのやうに述作には耽らなかつたかも知れんからである。三歳 (西洋流に滿を以て標準) の時に、彼は Sandyknowe なる祖父の農園に送られたが、早くも其處で古い物語詩などを學び知り、片語交りに誦してゐたと云ふことであるが、兎に角、幼少な時から詩人ボープのホーマーの英譯や、古傳説や、國境の物語詩などを暗誦してゐたのは事實である。次いで八歳の時に Prestonpans (エジンバラ市の八哩) に連れて行かれ、一七七九年にはエジンバラの高等學校に送られ、其處で校長の Dr. Adam 氏から羅典語を學んだが、彼の最も愛讀してゐたのは、矢張り浪漫的な古傳説や、中世紀の騎士物語や、詩などであり、また彼は子供の時から極めて巧妙な story-teller 『話し家』であつたと云はれてゐる。間もなく詩人は其處よりエジンバラ大學に入つて法律を學び、八十六年には、父親の事務所に入り、熱心に蘇國法を研究しはじめた。そして九十二年に (彼が二十一歳の時に) 辯護士となつた。また公用のために初めて蘇格蘭の『高地』 (湖上の美人) を訪ねた。そしてこの時、初めて彼のロマンスが初まつた、即ち彼は Margaret Stuart なる美しき婦人に深き戀を寄せることになつたのである。併し詩人のこの沈黙の戀は遂に報はれなかつたが、——彼



女はその後、他の男に嫁いだからであるが、——その戀は終世續いて、彼の生涯と作物とを色取ることになった。

彼の最初の文學的作品は獨逸の浪漫派詩人 *Dehmel* の物語詩 *Lenore* の翻譯であつて、これは一七九六年十月に出た。それから九十七年には英國の湖畔地方に歴遊し、其の間に、當時の佛國の王黨の亡命者なる人の娘 *Charlotte Margaret Carpenter* 嬢とある舞踏會で知り合ひになり、九十七年(彼が二十六歳の時)のクリスマス晩に二人は結婚した。また既に九十二年には彼は *Liddedale* (英蘇の境界に近き) に最初の詩人の所謂『入寇』を試み、それから九十八年まで毎年それを繰り返し、その邊の傳説や、物語詩などを集め、またその頃 *Gr. Lewis* の文集 (*Tales of Wonder*) のために『グレンフィンラス』(*Glenfinlas*) と、『聖ジョンの夕』(*The Eve of St. John*) の二篇の詩を書き、又九十九年にはゲーテの『ベルリヒンゲンのギヨツツ』(*Goets von Berlichingen*) の翻譯を出した。一方世間的の方面では、同じく九十九年の終り頃に彼は *Selkirk* 州 (英蘇の境界に近き蘇國の一州) の *sheriff* (奉行のやうな官吏) に任ぜられた。そして一九〇二年より同三年に亘りて、彼れの少年時代の同窓にして、當時出版業を営みし

*James Ballantyne* の手記の『國境吟詠詩集』(*The Border Minstrelsy*) を出し、また同一年に『最後の樂人の歌』(*The Lay of the Last Minstrel*) を書き初め、同五年に終つた。この敘事詩によつて彼は一躍して當代の最も人氣ある作家となつた。併し彼がかくバラントインと結び、彼の組合員となつた事は、彼の大きな不幸であつて、彼の後年の破滅の原因をなしてゐるのである。

一九〇四年に彼は *Tweed* (國境を流るる河) 河畔の *Ashetiel* (既出セルカーク州の首都) に移り、『エヂンバラ評論』に寄稿し、また小説『ウェイヴリ』(*Waverly*) を書き始めた。そして同六年に蘇國高等法院の書記官に任ぜられ、同八年に『マームイオン』(*Marmion*) が現れて、再び、世間より大なる喝采を以て迎へられた。また主としてジェフリ (Lord Francis Jeffrey 『エヂンバラ評論』の創始者の一人にして、批評家、法律家、一七七三年—一八五〇年) の評論に對抗せんがために、『クオータリ・レビュー』(*The Quarterly Review*) を起したが、同時にドライデンや、スイトなどの作物の編纂をはじめ、前者は八年に、後者は十四年に出した。

『湖上の美人』(*The Lady of the Lake*) が出たのは一九一〇年の五月で、これが出た時の



一般社會に於ける大なる人セシイメン 氣に就いては既に述べたから、今又こゝには繰り返さないが、かく作者は、益々名聲が廣まり、作品が頻りに成功するにつれて、財力も大いに豊かとなり、彼は始めて農場を買ひ、アボツフォード Abbotford に宏壯なる邸宅を構へた。併し十一年に出た『ロークン』(Rokeby) は比較的失敗の作に終り、十二年にはサウジイ (Robert Souley) のために欽定詩人たることを辭し、十四年には既出の『ウエイブリ』出で、大いに世間を驚倒せしめたが、作者は紙上には本名を現はさなかつた。その後二十七年まで、彼の小説は匿名を以て發表され、またその匿名は極めて巧妙に保たれてゐたと云ふことである。十八年には長詩『島の王』及び、小説『ガイ・マナリング』の二作出で、また續いて小説『好古家』現はれ、それより『ロブ・ロイ』、『ザ・ハート・オブ・ミドロージアン』、『ラマムウアの花嫁』、等出で、十九年にはかの有名なる『アイヴンホー』出で、また大人氣を博し、次いで二十年より二十四年に亘り、『修道院』、『僧院長』、『ケニルワース』、『クエンチン・ダワード』等の諸々の小説を出した。

彼は二十年に従男爵に叙せられたが、その名聲の盛んなるにつれて、各地よりこの大文

豪の風手に接せんとして、アボツフォードの邸宅を訪づる者、日々絶える間もなかつた。また上記の如く文學上極めて多忙なる生活を送つてゐたにも拘らず、公務は決して等閑にはしなかつた、(その細々しき事は餘り必要でないから、此處には略するとして、——) 然るに一朝既出の書肆バランタインが、その餘りに放膽無謀なる營業振りの結果、事業に蹉躓を來するや、十八年以後は作者は コンスタブル Constable より自分の作品を出すことにしてゐたが、又これも營業が失敗に歸し、その餘波を受けて、バランタイン書肆は遂ひに決定的大瓦解に陥り、スコットはその組合員であつたがために十二萬磅(邦貨に換算すれば百二十萬圓内外)てふ莫大なる負債を背負ふに至つた。これよりして彼は、公務以外のあらゆる時間と精力とを傾注して——實際は彼のものにあらざる負債償却のために、晝夜兼行、述作に従事し、さしも莫大なる負債をも遂ひに償却するに至つた、(但し、これは彼の死後にも亘つてゐる。)

そんな譯で、詩人の晩年は實に不幸續きであつた、彼の妻は二十六年五月十六日に死し、子供は分散し、彼の健康も衰へ、しかも醫師の勸告を無視して、過勞を續けた爲に、益々健康は悪化し、そしてそれを恢復せんとして、地中海に轉地療養を試みたけれども、その



甲斐もなく、再び本國に歸つたが、千八百三十二年九月二十一日、六十一歳を一期として、アボツフォードの邸宅に永久の眠りに就き、ドライバロ僧院 (Dryburgh Abbey) に埋葬せられた。

### 作家としてのスコット

スコットの心の偉大さと、その天性の眞實なる情愛と親切とは、少なくとも彼の驚嘆すべき天才と同様に特筆大書すべきものがある。また彼が極めて人情に富み、同情に厚かつたと同じやうに、私以外の仕事にも極めて着實機敏に立ち働いた。自己一身の仕事のために公務を等閑たいさうにしなかつたのみならず、またそれを完全に仕果してゐたやうである。又文筆の士としては彼は寛大以上であつた。嫉妬心や、羨望の念などは藥にしたくもなく、後代の人々から見て、餘り嘆賞すべき價値ありとも思はれざるが如き彼の同時代の作家をも、彼は喜んで賞揚してゐる。かのバイロンが大陸より歸り來つて、新鋭の勢すさまじく、當

時の詩壇に活動しはじむるや、スコットは詩壇を彼に譲つて、専ら筆を小説の方に染めはじめたるが如き、また既述のサウヂイのために欽定詩人たるを辭したるが如き、皆なこの謙遜の美德の一例でなければならぬ。

沙翁シエクスピヤ以來、彼の天才程、人情味に富み、創造力に豊かで、ヒューモアと同情と、詩味とに満ち、また彼の天才程、新らしくして、眞實なる人物を多く創出したものは斷じてあるまい。されば彼が大陸の文學に與へたる影響の大なることは實に驚くばかりで、單に獨佛、伊、西等の國々の文學に影響を與へたのみならず、また殆んどそれ等總ての文學の性質をも變へたと云はれてゐる程で、彼の作品は大抵の國語に譯出されてゐる。浮草の如く定めなく、唯だ新らしきもの、『走り』もののみを追ひ求めることに維れ日も足らざる我が國の文壇に、スコットの作品が全然ネグレクトされてゐるのは素より怪しむに足りない所ではあるが、我が文壇ももう少し落着いてもよさうなものだと思ふ、切めて二三篇位はスコットの作品の完譯も出ていゝものだと思ふ。

思はず筆が横道へ外れたが、彼の行文が往々にして鈍重、緩漫にして稍ともすれば緊約



を缺ぎ、又時には平凡に墮することすらもあり、光彩陸離、或ひは、拔群の域に達すること  
は滅多にないと云はれてゐるが、その蘇格蘭語の對話文に至つては眞に完全無缺で、彼の  
技巧の最高のもものと見られてゐる。また彼は話の筋にも餘り注意深くなく、ある仕組み  
を豫め定めて、それに固執することも出来なかつた。しかも彼の天才は、それ等總ての缺  
點にも拘らず、燦然としてその偉大なる光芒を放つてゐる。そして作者が一つの時代の娛  
樂のために書いたものは、實は不滅のものとして作られた結果となつてゐるのである。

彼の韻文には彼の散文よりも却つて忽卒、無頓着に禍ひされてゐる所が多いが、併しそ  
の幾篇かの抒情詩に至つては、眞に英詩中、最も清新で、最も音樂的で、又最も自然で、  
且つ生氣に富んでゐるものゝ一つであつて、また彼の『律語的傳奇物語』に於いては、一層  
靈感化されたる章句を除いては、雄渾、壯麗なる文體は無いが、その代りに、生氣と、麗流  
と、朗々たる旋律と、またロマンスのあらゆる魔力と、騎士道のあらゆる美とを備へてゐる  
ことは否まれない。と、同時にその大なる價値は又その描寫——主として外界の景色や、  
人間の——内面的にはあらずして——外面的行爲の精細なる描寫と、更にその力強き説話

法とにあり、そして筋の不精確さは、事件の迫眞的にして稀なる力ある描寫とによつて補  
はれてゐる。

### 湖上の美人に就いて

作者は一八三〇年に書いた本篇の序文に於いて、本篇の成り立ちを述べた中に、次のや  
うな事を云つてゐる。——『蘇格蘭の『高地』に住せる土着の種族の風俗習慣、生活状態等  
は、私には常に、詩には殊に適當してゐるやうに思はれてゐた。又彼等の風俗の變化も、殆  
ど吾々の時代の間につたものであり、又さうでないにしても、少なくとも私は前時代の  
老人達の口から『高地』の往時の状態に關しては澤山細々しき事を聞いてゐる。……また  
私は此のロマンチックな地方の事については澤山讀み、見、聞いてゐる。——其處で私は毎  
秋幾日かを送る習慣にしてゐたからである、またキャトリン湖の風光は以前の澤山の懐か  
しい友達や、愉快的行旅の思出と結び附いてゐるのである。そして極めて美しく、また私



の記憶に深く印象されてゐる景色の中にその事件を描いてあるこの詩は、云はゞ一つの『*hour of love*』である。……*チエイムズ*四世、殊に*チエイムズ*五世が屢々姿を變へて國中を遍歴することを習はしとされてゐたことは、聊かでも巧妙に、或ひは手ぎはよく扱へば、屹度非常に面白いものとなる出来事であるやうに思はれた、……』云々と。

作家は自己に最も興味ある事柄を最も美しく書き得ると、ある批評家は云つてゐるが、少なくとも、これを正當として見れば、スコットがこの作品に於て大なる成功を遂げた理由は、この序文を見ても大方明かであらう。彼自身は温良なる君子人であつたけれども、彼は中世紀的空氣、騎士道、冒險的生活等に無限の興味を寄せてゐた、純粹の浪漫主義者であつたのであつて、本篇の成功の一理由は確かにこの作者の興味と云ふ點にあつたことは争はれない。併し問題はしかく簡單には濟まない。彼の天賦の詩才は云ふ迄もなく、この詩の題材、人物、及び事件の取扱ひ方に於いて、作者は道を誤らなかつたからである。これに就いては、便宜上、スコットの作に對して常に辛辣なる筆を奮つてゐた彼の苦手の*チエフリ*（*チエフリ*の事）は既に述べた）の、初めて詩人に對して——大體に於いて——賞讃を惜まなかつ

た次の批評を上げて置かう、——

『スコット氏の詩にはミルトンの如き壯嚴、雄麗なる文體もなく、ボープの如き簡潔、典麗なる手法もなく、キャメルの如き洗練されたる雅麗さと節奏もなく、またサウジイの如き流麗、豐潤なる語法すらもないが、その代りに、無造作に、自由に組み合はせられたる冴えた象喩と、光彩ある語句の混淆とがある、——沙翁の如き無造作な豊富さと、古いロマンスの粗厲と古風な單純さと、通俗な物語詩や逸話の質朴さと、極めて現代的な詩の感傷的な光輝とによつて絶えず文をつけられてゐて、——おかしさの境から壯嚴の夫へと往來し、交互的に精細であつたり、強烈であつたりし、また時には技巧的であり、屢々粗笨であるが、しかし常に生氣と快活とに充ち、また何んな組織の頭腦にも、一見して著しく眼立ち、また普通の讀者にとつて理解するに骨の折れるやうな感情は決して描出されてない語法がある。大體に於いて吾々は『湖上の美人』を作者の従前の何れの作よりも優れたものだと考へたい。しかし吾々は、これが一層大なる美を有してゐると云ふよりも、寧ろ一層缺點が少ないと云つた方がいゝと云ふことを確信してゐる。……兎に角、本篇はその



語法に於いて一層洗練され、その韻律法に於いて一層接則正しく、その物語は無限により巧妙に、器用に組み立てられてゐる。……恐らく『マーミオン』にある戦争の如き秀麗な描寫はなく、また『最後の樂人の歌』に散見するが如き佳麗なる小品もないが、その代りに、その何れにも行き渡つてゐないやうな豊富さと、生氣とが全體に充ち渡つてゐる。……』

また——ジエフリの述べた順序には従はないが、——『彼の大なる人氣の秘訣と、その主なる特色とは、次の點にあるやうに思はれる、——彼は後の詩人の誰よりも、有ふれた話題や、象喩や、表現を用ひてゐる。……例へば主題の選擇に當つても、彼は單に美しい觀察や、悲壯なる感情によつて讀者の興味を起させやうとはせずして、話の助けを借りて、その注意の動機の中に讀者の好奇心を牽かうと努めてゐる。次にまた彼の人物も總て最も普通な詩の人物から選んでゐる、——即ち、國王や、軍人や、騎士や、追放者や、尼僧や、樂詩人や、世を忍ぶ乙女や、魔法使ひや、忠實な戀人やなどから選んでゐる。……又熱情を取り扱ふに際しても、彼は同様に通俗的で、また比較的平易な遣り方を追ふてゐるやうである。……彼は光彩ある描寫で讀者を眩惑せしめ、種々な感動の一時的烈しさで讀者の

心を興奮させてはゐるが、しかし如何なる處にも諸者の心を熱狂で燃え立たせたり、女々しい氣分に陥らせたりはしてゐない。そして世間一般の人を目あてとして書き、一般人の届くことの出来ないやうな高い所まで熱情を上げやうとするやうなことは賢くも控へ、更に日常の仕事や、娛樂を蔑しむやうな、かの高遠な熱中や、または日常の仕事の多くのものに不適當な、かの靜寂な、深刻な感性などを讀者の心に吹き込まうとはしないで、勇ましくして、親切で、愛情に富める人が普通の日常生活に於いて一般に感じるやうな感情を味ふ機會を讀者に與へることで満足してゐる……』と。

この意見は大體に於いて如何なる讀者も首肯する處であらうと思ふ。兎に角、『マーミオン』も、『最後の樂人の歌』も、それぞれの意味に於いて立派な作品ではあるが、全體より見て、本篇に團扇を上げざるを得ないことは、誰しも同感であらう。

さて、次に本篇の主要なる人物の描寫を簡單に論じて見やう。——浪漫派の文學に現はるゝ人物が、多くは單に大か小か、優か劣か、美か醜かの性質を備へた人間の姿をし、人間の衣服を纏つた幽靈に過ぎざるが如き感があつて、實人生、實社會の人間とは到底相



容れないやうな人物——眞實の人間の血の通つてゐないやうな人物の多いことは誰人も知る通りである。そしてスコットが人物の描寫に於いて、またその種々なる人物の創造に於いて、沙翁に次ぐの大家であることも事實であるが、唯だ異なる點は、前者は類型的なる點にある。——勿論その類型的なる中に大なる力を有し、生けるものゝ如く讀者に迫り、讀者の心を動かす處があるのであるが、屢々不可能的に善であつたり、餘りに勇武であつたり、また随つて餘りに不自然であつたりするのである。しかもなほ其處に人生の姿の現はれてゐるのは何故だらう？ それは前にも一言したやうに、驚くほど巧妙にして卓越せる精細なる細目の描寫——内面的にはなく、外面的に出來得る限り精密に各人の行爲や、外界の事情や、事件を描出し行くやり方によるのである。

兎に角スコットの如きロマンチストの作品に、自然派の作品に現はるゝが如き人物の描寫を求めんとすることは、土臺間違つてゐる事は云ふ迄もないが、篇中に於いて最もよく書けてゐるのは、何と云つても副主人公ロデリックと、女主人公エレンの描寫である、エレンの事は後段に譲るとして、作者がこの副主人公の描寫に成功した事は寧ろ作者にとつて

は意外なことであつたらうと思ふ。元來ロデリックは、芝居ならば「敵役」となるべき男で、悪人とさへ見えるやうに描出さるべきものである。然るに事實は殆ど全くこれに反して、たとへ一面に於いては聊か粗野、兇暴、短氣、無謀等の缺點はあるにも拘らず、その騎士的勇剛と信義と、その熱誠、正直、親切とは彼をして眞に好個の若武者とさへ見せてゐる。彼がフィツ・チェムズに對する態度の如き、實に讀者の感嘆を牽かすんば止まざるべきもので、又彼の従妹エレンに對する熱烈なる愛情の如きも、如何にも自然であつて、僭越不當の分子を發見することは出來ない。その嫉妬のために彼が理性を失ふが如きも、必ずしも特に彼のみに對して責むべきことではあるまい。従つて、よし彼の容貌は美ならずとも、何が故にエレンより、か程までに嫌はれ、又彼より大なる心づくしを受けてゐながら、何が故にエレンの父ダグラスはあれ程までにロデリック——しかも我だ甥に對して冷淡であるかゞ不審に感ぜられて來る。作者から最も虐待されてゐる？彼こそは却つて最も讀者の同情を牽きはしないだらうか、彼こそは篇中に於いて最も *high* ではないだらうか、彼こそは最も人間らしく、却つて讀者に懐かしさをさへ感ぜしめはしないだらうか？ また彼が



戦ひに出づるに臨んで、ひそかにエレンの歌を聞いて別れを惜むあの一齣の如きは、彼も案外に詩味のある男たるを感じしめるではないか。

これに反してエレンの戀人なるマルコムマルコムの描寫は全然失敗、或ひは極めて粗笨と云ふの他はないのを悲しむ。この事に就いてはヂエフリも云つてゐるが、エレン並びに作者スコットから受けてゐる深い愛情、或ひは好意から見ると、その餘りに影の薄く、餘りに人物の茫漠としてゐるのに甚だ物足りなく感ぜられる。實際作者がこの人物を入れたのは、恐らく單にエレンとロデリクとの戀を成り立たしめざらんがために過ぎまい、かくして茲に一味の悲劇的分子を添へんが爲めに過ぎないやうに感ぜられる。しかも彼とエレンとの戀たるや——勿論この戀を描くことが本篇の主要なる目的ではなかつたけれども、——そんじよ、そこの若い衆と箱入娘との戀の如く、何等特異な點も、悲痛な點もなく、平々凡々にhappy endingを以て終つてゐる。殊に第二篇、第三十四章のロデリクと彼との争ひの如きは、如何に最負眼に眼ても、彼は單なるおっちよ、こちよこちよの客氣に富んだ青二才としか見えぬ、これが果してエレンの愛と、スコットの賞讃に價ひする高貴なる若武者だとはど

うしても思へぬ。兎に角この争ひの一幕は確かに本人の名を汚すこと一方ならぬものであるのみならず、騎士道の穢れであり、またこの一篇の汚點であつて、作者は何が故にかゝる描寫をなしたかを吾々をして疑はしめる程である。

次にエレンの描寫はさすがに活躍してゐる、その風采も可成り明瞭に讀者の眼前に浮んで来る、——極めて美しい、愛らしい、優しい、そして總明で、思慮に富んだ少女で、同時に父親の氣象を受けついで、雄々しい、きかぬ氣の女であることが判る。確かに浪漫派の文學に現はるゝ愛すべき女の典型であらう。如何なる騎士のLadyとしても恥かしからぬ女であることは疑ひない。——けれどもエレンの父親のダグラスや、フィツ・ヂエイムズに至つては、各々それ〴〵の意味に於いて愛すべき、或ひい敬すべき人物で、殊に前者の剛毅と、寛仁と、高貴なる魂と、後者の騎士的勇剛、信義、愛情、寛仁大度、等は讀者の同感を牽くことを誤らざるものではあるが、矢張り類型に墮してゐることは争はれない、生きた人間の分子が餘程少なくなつてゐるのは已むを得ない。

更に一般の事件や、自然の描寫について一言すると、第一篇の第十一章から第十四章に



亘るツロサクスの描寫、並びに第三篇の第二章のキャトリン湖畔の夏の曙の描寫の如きは、作者の詩上の風景描寫の美と巧妙とをよく發揮せるもので、また第三篇の第十二章から第二十四章に至る間の『火の十字架』の駆け廻る見ざましき描寫、第五篇の第五章に於けるロデリクが埋伏せる部下を喚び起す劇的な描寫、少し下つて第十五、第十章六のフィツ・ヂエイムズとロデリクとの一騎打の描寫の如きは確かに作者の力強き、<sup>ワイルド</sup>迫真的な描寫の好例である。若し夫れ第六篇の中の『ビイル・ファン・ヅウインの戦ひ』の描寫に至つては、主人公の戦ひに加はらざるにも依らうけれども、かの『マーミオン』や、『最後の樂人の歌』の中にある戦ひの描寫に一籌を輸するとは世人の云ふ處ではあるが、決して凡作ではないことは勿論である。

終りに、拙譯は原文の他に、<sup>ハインリッホ</sup>Heinrich <sup>ディエホフ</sup>Diehoff 及び <sup>エミナ</sup>Emma <sup>エルンスト</sup>Erlent の獨逸譯本を参照して多少得る處があつた。地名及び人名の書き現はし方に就いては、聊か從來のコンヴェンションを破つた積りではあるが、田舎に住む身の悲しさは、手元に良好なる参考書なきために、

中には譯者の想像にて定めた發音もあるのを遺憾とする。——序でながら、譯文に於いて、ペン・ヴェヌーを『ペン・ヴェヌー山』とし、グレン・フィンラスを『グレン・フィンラス谷』とせるが如きは、(ペン)は『山』、(グレン)は『谷』を意味するを以て、(重複の嫌ひがあるかも知れんが、日本語を英語に譯する場合に於てもかゝる類例はあるから、暫らくこのまゝにして置くことにした。また附圖の作成は他人に依頼したのと、其の後、見直す暇もなかつたために、若し本文に於ける地名の發音と齟齬する所あれば、幾重にも御宥しを請はなければならぬ。更に、譯文中、諸處に加へた註は、譯者の附け加へたもので、一般の讀者の参考に資せん積りであるが、中には取捨宜しきを得ざる所、簡詳宜しきを得ざる所もあるかも知れんが、若しあらば、これも御容赦をお願いしなければならぬ。なほ、譯文につき、地名人名の發音につき、誤れる所あれば、偏へに世間博學の士の御叱正をお願いしたい。それは骨に譯者のみの幸福ではないであらう。尙ほ、地名の發音は主として『センチュリ大辭典』に據つた事を附記して置く。

大正九年夏七月

譯者識



The Lady of the Lake

by

Sir Walter Scott

英吉利 ウォルター・スコット作

湖上の美人

藤浪水處  
馬場睦夫 共譯

東京 洛陽堂出版

1920



目次

第一篇	鹿狩り	一頁
第二篇	湖上の小島	六九頁
第三篇	氏族の集合	一四九頁
第四篇	豫言	二二頁
第五篇	一騎打	二九七頁
第六篇	衛兵の詰所	三七五頁



## 挿入寫眞目次

一、原作者の肖像……………	卷頭
二、附圖(蘇格蘭、スターリング、パース兩州地方の一部の圖)……………	卷頭
三、『牡鹿は夕べに月光おどる』……………	四頁
モオナンの小川で十分するだけ水を飲み、……………	四頁
四、エレン初めてフイツ・ゲエイムズに會ふ……………	三七頁
五、エレンが島(及びキヤトリン湖の一部景)……………	四五頁
六、ホーリ・ルワド宮の景……………	八九頁
七、グレン・フィンラス谷の景……………	三三頁
八、スターリング城の景……………	三三頁
九、『今夜はロイスが俺の寢床、炭の繁みが俺の屏風、歩硝の足音が俺の眠り歌、戀とお前に遠く離れて、ノエリイよ』……………	一九九頁
十、ツロサクスの景……………	二六七頁
十一、フイツ・ゲエイムズと、ロデリクとの一騎打……………	三二頁
十二、ビイル・アン・ツウインの戦ひ……………	四〇頁
(『喚き、叫びつ、喊聲を上げ、縞羅紗帽子をひるがへし、劍をふるひ、狂氣の如く、アルピン軍は後ろに迫りつゝ、』)	

## 要旨

本篇の舞臺は、主として(蘇格蘭)パース州の西方高地なるキヤトリン湖地方に置かる。事件進行の時日は六日間に亘り、各一日の事件は、各一篇を占むるものとす。



# 第一篇

## 鹿狩り

聖ホフィランの泉を覆ふ うな垂れた楡にれの木に

長い間懸りつゝ 朽ちて行く『蘇格蘭の豎琴』よ、

唯だ折々定めなきそよ風が 君の音楽を奏でたけれども、

遂に 嫉み深い常春藤が君の身に纏りかゝつて、

君の總ての絃をば 緑なす巻鬚で包んで了つた、――

あゝ！伶人 豎琴よ、君の音は斯くいつまでも眠つてゐていゝのか？  
木の葉ささやき、泉さわめくその音に包まれながら、



君のそれよりも更に美妙的な音は、尙ほいつまでも黙してゐるのか？  
勇士を微笑まし、少女を泣かすこともしないのか？

(\* 聖フィランはスコットランドにて可成り有名なる聖僧にして、同國にはその名を冠せし禮拜堂、靈泉等多く、かゝる泉はパース州にも數個ありと云ふ。

\*\* 本節及び次ぎの二節よりなる本篇の序歌は、古詩人が詩神(ミューズ)への祈願を以て詩を書き初むる例に倣ひ、スコットランドの豎琴を詩神になぞりて、其れに對する祈願を以てせるもの。)

昔 蘇格蘭がカリドオニヤと云はれた時代には

祝宴に集ふ人々の中に 君の音はこのやうには黙してゐなかつた、――

あの頃には 譽れある勝利の歌は隠せる者を鼓舞し、

悲痛な片戀の歌は 驕れる者を抑へてゐたのだ。

君の熱烈なる諧音は 歌とよく調和して

その切間々々に 崇高に 朗かに響き(豎琴は我國の琵琶などと同じく、歌のきれ間きれ間を満たす。)

美しい貴女や 嚴しい領主等は心をとめて其れに耳を傾けたのである。

君の歌曲は 常に武士の勇ましい業蹟や、

美人の比ひなき魅力を取つたものであるから。

あゝどうぞ再び眼を覺ましてくれ、君の千變萬化の魔曲に

大膽にも手を觸れやうとする私の技は、いかにも拙ないけれども、

あゝどうぞ再び眼を覺ましてくれ、私の技量は

君の昔の歌の、か弱い反響をさへ殆ど傳へることは出來ず、――

その音は聞きづらくて、微かで、直ぐ消え失せて、

全く君の氣高い曲の穢れにならうけれども、

もし唯だ一人の人の心でも この力によつて尊い感情を起すことが出來れば、

君の魔曲も 觸れた甲斐はないことはあるまい。



それならば もう黙するな！『魔女』よ、どうぞ再び眼を醒ましてくれ。

牡鹿は夕に 月光おどる

モオナンの小川で十分するだけ水を飲み、  
夜半の寢床を寂しいグレン・アートニ（蘇國、バアス州、アーン湖の南にある谷の名）の奥深く  
こもれる榛の木蔭に作つた。

然るに 朝暉がベン・ヴォーリヒ（グレン・アートニの西北にある山）の嶺に  
紅色なす合圖の光りを抛けかけると、  
大聲の獵犬の 重々しい叫び聲が  
岩だらけの道に反響を起して来て、  
更に遠くの方からは ボカ／＼云ふ馬蹄の音と

號角の響きが微かに聞えて来た。

二

『戦闘準備をなさい！ 敵が城下に攻め寄せて來ます』と  
番兵の叫ぶのを聞いた大將のやうに、

曠地の王者は 角振り立て、

ヒイス（しやくなき科の丈低）の褥を急いで跳び出したが、

先づ 天のやうに駈け出す前に

脇腹から 玉なす露の雫を振り落して、

嚴しい兜を戴いた 氣高く 慢らかな主將のやうに、

美事に生へそつた角を高くふり翳し、



しばし 下なる谷間をちつと見卸し、  
しばし 追手の匂ひのする風を嗅ぎ、  
獵手の近づいて来るまゝに 繁くなる  
獵犬の叫び聲に しばし耳を傾け、  
それから 眞先の敵が現はれて来るや、  
たゞ一飛びに 勇ましく藪を跳り越え、  
ずん／＼と 自由に遠く前へと進んで、  
ウエイ・ヴァー山の蓬々たるヒイスの原を求めた。

三

その姿を見るや 群なす犬は口々に哮え叫び、  
巖も 谷も 洞穴も 其れに符し、

眠れる山も忽ち眼を覺まして、  
多くの入り亂れた聲に反響を起し、  
幾百の犬は 逞しく 底力のある聲で咆え叫び、  
幾百の馬はばた／＼と駈けずり廻り、  
號角は陽氣に 朗かに鳴りひびき、  
幾百の人聲は 叫喚を上げてそれに合し、  
掛聲や 喊聲や 烈しい嗾け聲で、  
ベン・ヴォーリヒ山には反響が絶える間もなかつた。  
牡鹿はそのどさ／＼騒ぎから遠く逃れ、  
牝鹿は木深い隠れ所の中に丸く縮こまり、  
鷹は これ等の紛亂雜沓した群を  
高い石塚の上から訝しげに眺めてゐたが、  
遂に狩獵の群はその鋭い視野の外遠く



疾風のやうに谷間をどよめき馳せすぎ、  
消え行く喧囂は 巖や 絶壁や 谿間から  
いよいよ微かに弔して来て、  
たうどう寂しい森も 高陵も  
あまねく深い沈黙に包まれた。

四

狩獵の騒ぎも ウエイ・ヴァーの峰は  
さほど荒々しくは騒がさず、  
また昔 一人の巨人が隠れ所を作つてゐたと云ひ傳へらるる  
其處にある岩窟も さほどは騒がさなかつた。  
それは その険しい坂をまだ登らぬ前に、

日は既に大空高く懸かり、  
多くの騎馬者は立ち停ることを餘儀なくされ、  
疲れ ためらふ馬に止むなく息をつかし、  
また鹿を追ふ犬の身近にあるのは  
その半ばにも達しなかつたからである。  
このやうに烈しく 彼等は山腹を  
勢に任せ 勇ましく ひた走りに走つたのであつた。

五

氣高い鹿は 今しも山の  
南側の懸崖の出張に足を停めてゐた。  
その遙か下には 美しいメンチイス(チイス河附)の



變化に富んだ國土が廣々と擴がつてゐた。

不安さうな眼附をして 山や 牧場や

澤地や 野邊をあちこちと見廻して、

遠く アード湖(ロオモンド湖の東北)か 又はアバアフオイル(アード湖の東端に位する村)のあたりで

苦難からの避難所を求めやうかと思案顔。

しかしアクレイ湖畔に枝を垂れつゝ 打ち戦たたかぎ、

ベウ・ヴェヌー山(アクレイ湖はキヤトリン湖に隣接し、)の峻しい絶壁の

青い松林まで擴がつて、それに打ち混まつてゐる

灰色の矮林こはやしの方が一層身に近かつたから、

希望と一緒に新らしく勇氣も出て来て、

飛ぶやうに ヒイス(第二節四行 目を見よ)の原を駆け越えて、

弛たまず西の方に馳せつゞけて、

喘ぎ喘ぎする追手を遠く後に残した。

## 六

獵人達ハンターがキャンバス・モア(キヤランダの近く、チイス河の支流なるケルチ河畔の地)を馳せ過ぎた時に

幾ばくの乗馬がひよこたれたか、

ベン・レヂの嶺たかねが空高く聳えてゐるのを見た時に

幾ばくの人が絶望して手綱を止めたか、

誰がボホアスル(ヴェナハ湖より出ずる小流に洗はるゝ曠野)の曠野で疲れて了つたか、

誰が漲たぎるチイス河(二つの流れ——一つはヴォオイル湖より、一つはキヤトリン湖より出で、キヤランダにて一つに合す。)を泳ぎ渡るのを

避けたか、

——この日 勇ましい鹿は逃げ行く間に

二度も流れを勢よく泳ぎ渡つたのであるから、——

それを一々話すとしたら容易なことではない。



かくして 伴に離れて 遠く獲物を追ふて行つて、  
ヴェナハー湖畔に達したものは極めて稀で、  
ブリグ・オヴ・ターク（『猪の橋』、右の湖水の  
近くにあり）に達した時には  
真先に進む騎手は唯だ獨り馬を進めてゐるのであつた。

七

獨りほつちになつたけれども 少しも熱心は鈍らずに、  
件の騎手は頻りに鞭と柏車とを動かした。  
それは 今や勞苦に疲れ 弱り果て、  
口からは泡を吹き 薄穢く泥土に塗れ、  
つく息ごとに嘔り泣くやうに喘ぎつゝ  
努め努め 苦しさうにして進む牡鹿の姿がまる見えになつたからである。

と、勇氣に 根氣に 足の速さに  
比類のない 黒毛の聖ヒューバート種の二頭の獵犬が、  
逃げ行く鹿の跡に さつと差し迫つて、  
間一髪の處で 死物狂ひの獲物を得やうとした、――  
その體を去ること槍の長さ程もない處までも、  
頑丈な獵犬は 執念深くも詰め寄つたからである。  
併し、こんなに犬が獲物に近づいた事も稀で、  
又、こんなに獲物が遠くへ逃げのびたことも稀なのであつた。  
このやうに彼等は 湖水のほとりを  
斷崖や 林の間を 木の根 岩角踏み越えて  
追ひつ追はれつ 疾走するのである。



狩獵者は 寂しい湖水の西岸をとり圍む  
高く峙つ山を眼にとめ、

その岩壁が大きな城壁のやうに 道を遮つてゐるので、

鹿はきつと向き直つて犬に抵抗するだらうと思つて (鹿は逃走し得ざるやうになる時は、  
向き直り、必死となりて犬に抵抗し、

身に迫る危難を防  
がんとすと云ふ)

早くも立派な獲物を誇りながら

その角又の大きさを眼分量で量つて見て、

致命の傷を與へ、仕止めたことを聲高く知らせるために

息をこらし、匕首を抜きはなつた、――

然るに 彼が腕構へをして 匕首をひらめかし、

止めを刺す用意をしながら 電光の如く突進して來た時しも、

こざかしい鹿は その突撃から身を交し、

前面の巖からひらりと身を轉じて、

それから小圍い谷間を突進り下りて、

忽ち獵犬と 狩獵者の眼から姿を消して了つて、

ツロサクス(キャトリン湖、アクレイ)の一番荒れ果てた隅、ここに

獨り寂しく危難を避けた。

そして其處に小さく縮こまつてゐる間に、灌木の茂みは

冷たい露の雫と 野生の花をその頭に注いだか、

彼は 斯く裏をかゝれた獵犬が

窪まつた山路を狂氣のやうに駆けづりながら

返す岩に無益に咆え叫んでゐるのを聞いた。



狩獵者は 獵犬を勵まして 隠れた獲物を捜し出させやうと

獵犬のそば近くへ進んで来たが、

勇ましい馬も 今は疲れ果て、

でこぼこした谷間に躓き倒れた。

騎手はいら立つて 柏車や手綱で

馬を起さうと努めたけれども 無益であつた。

健氣な馬は とうとう精根盡きて、

四肢を硬く伸したまゝ もう何うしても立たうとはしなかつた。

其處で初めて騎手は憐れみと悔恨の念に打たれて、

息絶えんとする馬に取りすがつて嘆いた、――

『あゝ比ひなき駿馬よ、俺が初めて

セイヌ河畔でお前の手綱を取つた時には

この『高地』の鷲がお前の肉を餌にしやうなどは夢にも思はなかつた。

勇敢な灰色の馬よ、お前の命を奪ふやうになつた

今日の狩りと 今日の日こそ 實に呪はしいわい！』

そこで 無益な追跡から獵犬を呼び返すために

彼が號角を吹き鳴らすと、それは谷中に響き渡つた。

狩獵の先導者達は 拗ねたやうな顔をして

のろく 惱ましさに びっこを引きつゝ歸つて来て、

尾を下け 失敗を恥ぢるやうに首をうな垂れながら



主人の傍近くすり寄つて来た。

しかし奥山の窪まつた狭間にはなほ依然として

ラツバの音が高まりつゝ、絶えず響いてゐた。

梟等は、午後の夢から怯え立ち、

鷲達は、叫びを上げてそれに答へ、

音は段々と、遠く、廣く傳つて行つて、

とうとう羽は、疾風のそれに答へる音かとも思はれるやうになつた。

さうして狩獵者は、今日の狩獵の伴の誰かに會ふべく

て、てくと途を進みはじめたが、

途中で屢々足を停めた、——路の有様が非常に珍らしく、

あたりの景色が如何にも不思議に思はれたので。

十一

沈む夕暉の光りの波は

水平に峡谷の上に漲り渡つて、

紫紅色の嶺も、峨々たる絶頂も

悉く眞紅な火の海の中に浴したが、

しかし下の闇い幽谷には

夕陽も射し込むことが出来なかつた。

其處には、陰に隠れた山路が

雷に裂かれた尖頂を

だしぬけに豁間の中から突き出してゐる

尖錐塔のやうな澤山の岩山や、



關道を衛る自然の堡砦か、またはかの空しい野心に驅られた人達が推参しくも天まで届かせやうとして

シヤイナアの野に築いたと云ふ高塔(Babel Tower)のやうに大きい

親山から分離した巉巖の塊りの縁を巡つてゐた。

そして引き裂かれた岩山の絶頂は

小塔か 圓屋根か 鋸壁のやうな形を呈し、

或ひは奇怪にも、圓塔か 尖塔か

波斯の聖塔か または東洋の

回教寺院の屋根を飾つたことも稀なやうな

異様な峰を戴いて峙つてゐるやう。

又これ等の自然の城砦は裸ではなく、

澤山の美しい旗をも缺いではゐなかつた。

それは それ等の裂かれた懸崖からは

深い 深い森中の空地の遙か上に

きらきらした露の玉に煌めきながら

美しい茶麻が緑色の翩旗のやうに長い細枝を垂れてゐるのが見え、

また無数の色彩をした 地を這ふ灌木が

夏の夕の そよ吹く西風の中に戦いでゐたからである。

十二

慈悲深い自然は 山の子なる木や 花を

惜氣もなく 氣儘に撒きちらかしてあつた。

こなたには エグランチン(薔薇屬)の植物が空中に芳香を散じ、



かなたには 山楯さんさじや 榛はしばらが枝を交へ、

薄青い櫻草と 紫色の莖の花は

崖の窪みごとに狭い住家すんかを作り、

また高慢と 懲罰しほしとの表象なる

實チ荑答利斯タリス（高慢の夷象）と 龍葵いぬはら（懲罰の表象）は相並んで、

風雨に曝された、種々なしみのついた岩と一緒に

黒づんだ色をかためてゐた。

また風の吹くごとに枝の揺ゆる

灰色の白樺と 白楊はこやなぎが その下に枝を垂れ、

高い處には 秦皮あまのこと 逞ましい榎えんが

裂目のある岩に深く根をおろし、

なほその上には 幹の裂かれた松の木が斜めに懸かり、

空高く顔をつき合せてゐる断崖の間から見える

狭い空をよぎつて 其處此處に枝を差し延べ、

さうして一番高い處には 灰白の峰の輝く處に

薔薇ばらや春常藤はるじょうとうの長く垂れた きらめく細枝が

揺ぎつ 踊りつする處に、彷徨さまよふ獵人かりびとの眼は

僅かに眞夏まなつの空の快よい碧色を見ることが出来た。

かくも全體の景色は不可思議ふしぎに 恣しつにして、

宛まなら夢に見る魔界まがいの景色とも思はれる程であつた。

十三

なほも進む内に 矮林こやしの間から

野鴨かひの雛さへも その水面で

殆ど満足に泳ぎ兼ねるやうな



寂しい 静かな 細い入江が覗きはじめた。  
併し叢林に遮られて しばらくの間姿を隠し、  
再び現れて来た時には 一層廣くなつて、  
高い巖や 草木に蔽はれた岡丘が それ等の姿を  
その紺青色の水面にうつすことが出来るやうになり、  
更に前へと狩獵者が彷徨ふて行くと、  
その水幅は一層廣くなつて、  
茫々と草木に蔽はれた小丘は  
もう こんぐらがつた森の中から突き出てゐるのではなくして、  
四方を濠でかこんだ城のやうに  
波に取りまかれて 泛んでゐるやうに見えた。  
しかし更に近づくと、水面はなほ一層廣くなつて、  
それ等の小丘は 親山から分離し、

仕舞には五ひに後へ退いて、  
各々湖上の小島となつた。

## 十四

さうして今や谷間から出やうとするには  
彷徨ふ人には 十分に足元に注意をして  
遠く突き出た絶壁を攀ぢ登るより外には  
如何なる路も あたりには見當らなかつた。  
そこで エニシグのねばり強い根を足掛りとし、  
榛の若枝に手掛りを求め  
かうして彼はかりとした高所へ出て来た。  
その下には 磨きたてた純金を引き延べたやうに



キヤトリン湖が 夕暉に輝きながら  
岬や 絶壁や 入江や、

また華やかな紫紅色に染まり、

なほそれよりも色冴えた光りの中に泛んでゐる島々や

魔界を護る巨人のやうに突つ立つた山々とともに

その全身を現はして 遠くうね／＼として擴がり、

また高く 南の方には巨大なベン・ヴェヌウ山が

前世紀の地球の遺物――

巖や 圓丘や 小丘を 澤山一緒にかためて

湖水にごつちやに落してあつた。

そして荒れ果てた森はベン・ヴェヌウの荒廢した山腹や

灰白の天邊を羽毛のやうに飾つてゐるが、

一方 北の方には ベン・アン山が

高く中空に禿けた額をそびやかしてゐた。

十五

土地に不馴れな狩獵者は 嶮岨な岬から

驚き 且つ有頂天になつてこの景色を眺め入つて、

『ここは何んなに好い景色となるだらう！』と叫んで、

『國王が榮華を、大僧正が傲奢を肆まゝにする處とすれば！

この嶮しい斷崖の出張りには 王者の塔を、

あの柔かな谷間には 貴婦人の別莊を、

あの向ふの遠く離れた草原には 僧院の小塔でも建てたとすれば、

どんなに楽しく號角は 湖上に

遅々として明けやらぬ朝の歌を咎めるやうに歌ふことだらう！



また林が静かで ひつそりとした夕方

戀人の琵琶の音は どんなに美妙に響くことだらう！

そして 夜半の月が銀波の中に

その青ざめた額を洗ふ時に、

遠くから眩くやうに聞えて来る夜半の祈禱の聲は

どんなに厳かに耳に傳つて来ることだらう！

同時に 殷々たる夜半の鐘の 強い 嚴めしい響きは

向ふの寂しい小島に草庵を結んでゐる

尊い隠者の眠りを醒まさせて、

鐘の音ごとに 珠數をつまさぐりながら祈りを上げさせることだらう。――

そして 號角も 琵琶も 鐘も 皆な

路に迷つた總ての異郷の人を

うちとけた饗宴と 明るい座敷へと招くだらう。

十六

『さすれば かう云ふ處を彷徨ふのは本當に楽しいことだらう。』

しかし今は――あの向ふに姿を隠して了つたすばしこい 小癩な鹿のお蔭で、

あの隠者の乏しい夕食のやうに

矮林をば自分の夕食の薪とし、

何處かの苔深い土堤をば夜の寢床とし、

さゝやく櫛をば屋根としなければならぬのだ。

しかし そんな事は我慢が出来る。戦争や 狩獵の際には

休みの場所なんかは選んではゐられない。――

寂しい森の中で送つた夏の一夜も

その翌日となつて見れば 一つの慰みに過ぎまい。



しかしこの當りの物騒な荒地には  
逢はない方が幸ひな曲者が澤山住んでゐるかも知れない。  
此處で『高地』の追刺どもに出會すのは  
馬や 鹿を失ふよりも一層悪からう。――  
自分は唯だ一人だ。――しかし號角を吹けば、  
扈從の内、誰か路に迷つてゐるものが来るかも知れん。  
それとも 若しも 不幸中の不幸事が起れば、  
自分はこの偃月刀の手並を見せてくれよう。』

十七

ところが彼が再び號角を吹くや否や  
意外にも、小島の岩から斜めに生えてゐる

一本の榭の古木の下から  
その音を聞いて跳び立つたやうに  
一人の少女に操られた小船が矢のやうに入江へと出て來た。――  
優美な 深い曲線を描いて 峻しい岬角を繞り、  
殆ど眼に見えぬやうな小波を湛へて  
岸邊に並んでゐる 枝の垂れた柳の梢を洗ひ、  
また雪のやうに白く輝く小石の磯に  
靜かに 咳きながら接吻けしてゐる入江へと出て來た。  
狩獵者が 丁度自分の立つてゐた處を離れて、  
この『湖上の美人』をこっそりと見やうとして  
叢林の中に姿を隠した時に、  
ボートは既にその銀色の磯に着いてゐた。  
少女は さつきの幽かな號角の響きを



再び聞き取らうとするやうに 手を休め、  
頭あたまをもたけ、餘念あまのりのない面持おもてをして、  
瞳ひとみを凝らし、耳みみを欬そはだて、

攀かみ髪かみを後ろうしろに抛なげやり、心持こころもちち口くちを開ひらいて、

—— 古代希臘の彫像のやうに——

如何いかにも聞ききたけな容よう子こで立たつてゐた、

その有あ様さまは宛あたら渚なぎさを守まもる水みづの精せいかとも思おもはれた。

### 十八

いや、希臘の彫刻家も これよりももつと美しい姿すがたをし、

これよりももつと愛あいらしい顔かほ貌ぼうをした森もりの精せいも 水みづの精せいも

また美うつくの神かみの像ざうをも刻うまなかつたであらう！

太陽は熱い光りでこの少女の兩頬ほほを

微かろかに褐かっ色いろに染そめてゐたけれども そんな事は何なにでもない。

單ただに串談じやうだん半はん分のやうに 輕かろく 小こさく漕こぐ勞らう力りきも

彼女の焙ほつた頬ほほを非常ひじょうに美うつくしく染そめだし、

また 更に忙いそしく胸むねの高たかまる時には

彼女の雪ゆきのやうな胸むねをちらりと見みせた。

その步あ態たいは かの嚴いめしい 調てう子しのある

優雅ゆうな宮中みやちゆう風の歩あみ方かたではなかつたけれども そんな事は何なにでもない。

彼女のそれよりも更に輕快かろな 更に正ただしい足取あしどりは

ヒイスの花はなから露つゆの玉たまさへも落おさなかつた程ほどで、

しなやかな山小やまこ菜なさへも彼女の輕かろやかな歩あみから

平氣へいきではね返かへつて 頭あたまをもたけてゐた。

また彼女の言葉ことばには聊やまぐにか山國やまくに風の



訛りがあつたけれども そんな事は何でもないので、  
その如何にも柔かで 愛らしい 銀鈴のやうな聲を聞くと、  
狩獵者は思はず息を留めた程である。

### 十九

この少女は或る酋長の娘と見えた。――  
その縞子の結髮紐(以前、蘇格蘭に於いて、未婚の少女の頭に巻きつけし一種のリボン)と、その絹の碁盤縞の肩掛と  
その黄金の襟止めとが 其れを示してゐた。  
また このやうに 取りつくろつてはないが 豊かな髮髪に  
結髮紐の巻かれたことも減多にあるまい。  
その艶やかな黒い色に比べては、  
鳥の翅はねも顔色がないくらゐで、

また このやうに美しい胸が 慎ましく 注意深く  
格子縞の肩掛に包まれたことも少なからう。  
またこれよりも善良で 優しい心の上に襟止めが  
肩掛の褶を留めたことも決してないであらう。  
このエレンの優しさと その價值とを知らうと思へば、  
たゞ彼女の眼を見詰むれば好いのだ。  
そのあらゆる天真爛漫な一瞥は  
キヤトリン湖が その青い水面に  
蓬々と樹立に覆はれた岸の姿を映すよりも  
一層忠實に彼女の心の無邪氣な働き方を示すのである。――  
彼女の黒目勝な眼の中に 歡びの色が踊つてゐやうと、  
或ひは 不幸 または憐憫の情のために溜息が出かけやうと、  
或ひは 親に對する子たる愛情が其處に燃えてゐやうと、



或ひは 優しい信仰が祈禱となつて溢れ出やうと、  
或ひは 非道な話を聞いて 彼女の心の底にある  
北國人らしい激しい感情が湧き立たうと、  
總て 明かにその眼差まざしの中に現はれるのであつた。  
しかし唯だ一つの感情だけは隠されてゐた、  
彼女はそれを少女の矜持から匿してゐるが、  
その熱情もまた他の感情と同じやうに純潔に働いてゐるのであつた、――  
あゝ 私はその名を云ふ必要があらうか！

二十

號角クラッがそれ限り鳴らないのに堪へ兼ねて、  
とうとう彼女の叫ぶ聲が風につれて聞えて來た、――



(四) 「クラッバを吹いたのはこのお見知りのない男です」と、狩獵者は榛の藪影から進み出ながら云つた。」

(第三十七頁参照)



『お父さま!』と 少女が呼ぶと、周囲の岩は

嬉しさうに彼女の優しい聲に長い笹を起した。

少時の間彼女は黙つてゐたが、何の返辭もなかつた。――

『マルコムさま、あなたが號角を吹きなされたの?』

この躊躇ひながら云つた名前は力なく消えて、

反響もその音聲を傳へることが出来ない程であつた。

『號角を吹いたのは、このお見知りのない男です』と

狩獵者は、榛の藪影から進み出ながら云つた。

少女はびっくりして、忙しく櫓を操りながら

岸邊から小船を押し進めて、

それから 陸地から幾らか離れた處へ來ると、

弛み勝ちになつた胸を搔き合はせた。

(驚いた白鳥は、いつもこのやうに漂ひ去り、



またこのやうに亂れた翅を啄き整へるものだ。  
それから 驚き わくわくしながらも、  
これなら安全と云ふ風に手を停めて、見知らぬ人を見詰めた。  
彼の姿も 彼の眼附も よく若い少女達が  
それを見ると逃げ隠れしたがるやうなものではなかつた。

二十一

彼の大膽な顔貌には 中年者の  
智慧と分別とが微かに表はれてゐたが、  
しかしなほ青春の卒直な真心と、  
熱烈な無愷の面影も消えてはゐなかつた。  
また 奔放にして 快活な氣質も

鞏固な意志も 不敵な魂も、  
性急な戀や 急激な憤怒に 直ぐ火のやうに燃え易い  
爛々たる眼差も窺はれるのであつた。  
彼の四肢は男らしく發達してゐて、  
如何に困難な狩獵にも 如何に激烈な戦ひにも堪へ得ることを示し、  
また 甲冑ではなく、たゞの平服を纏ひ、  
劍の他には何の武器もつけてゐなかつたけれども、  
その威風堂々たる風采は 恰かも彼が  
領主の紋章附きの兜を戴き、  
厳しく武裝して岸邊に立ち出でたやう、  
高貴な心と 武勇の誇りとをそれとなく示してゐた。  
彼は その容子に現はれた自分の今の困苦を物ともしないやうにして、  
狩獵の途中に日が暮れた次第を告げた。



彼の言葉は淀みなく、すらすらと心地よく流れ出た。いかにも優しく、慇懃な言葉遣ひではあつたが、その口調も、その優しい身振りも、平常、願ふことよりも、寧ろ命することに馴れてゐるやうに見えた。

二十二

少女はしばらくの間、見知らぬ人を見詰めて、それから、安心すると、『高地』の人達は山中の荒地で路を迷つた人をば、いつでも親切に迎へると云ふやうなことを仕舞に答へた。『また、あなたが向ふの寂しい小島へ——妾達の淋しい住家へいらッしやるのは、思ひ掛けのないことだと思召してはいけません。』

今日、まだヒイス(種しやくの丈低き灌木なぎ科の一)の露も乾かぬ曉方に、妾達はそれを刈りて、あなたの御床をこしらへ、また、あなたに夕飯のおもてなしを致すために、妾達は向ふの紫紅色をした山の峰で、松鷄と山鳥を射殺しまして、

湖水でお魚を大網で掬ひましたのでございます。『いや、愛らしい御嬢様』と、武士は云つて、『確かにその御厚遇はお門違ひでございませう、待ち設けられた御客様のおもてなしをば、私が横取りして、戴く権利はありません。私は、路も、侶伴も、馬も失つてしまつて、偶然こちらへ出て来た、たゞの彷徨人です。今、この湖水の小説に見るやうな岸で——』



仙境の仙女のやうなあなたにお逢ひするまでは  
この山國やまくにの空氣を吸つたことは  
全くこれまでに一度もありませんのです。』

二十三

『それは全くあなたのおつしやる通りでございます』と  
少女は小船を岸に進めながら答へた。――

『あなたがこれまで一度もこのキャトリン湖畔をお踏みなすつた事がないと云ふ事は  
全くあなたのおつしやる通りでございます。』

けれども 昨夜アラン・ベインが あなたのお困りの様子を豫言致しました。――  
アランは白髪頭の老人でございまして、

その鋭い眼は未來の姿をも明かに見ることが出来るのでございませう。

彼は あなたの灰色の斑そばの馬が

白樺に蔽はれた路傍で死んでゐるのを見ました。

また あなたの御姿や 御風采や

あなたの緑色の獵衣りゅういや

總かぶで飾つた 美しく鍍金した號角ラッパや

あなたの御佩劍ごはいけんの曲つた刀身やや 櫛くしや

鷺の羽毛はねで飾つた 御帽子や

また向ふの黒い 顔の怖ろしい二頭の獵犬の容子などを詳しく述べました。

老爺ぢやうは 身分の高い御客様のお迎へに落度おちどのないやうに

萬端の準備をせよと申しましたのでございませう。

けれども妾はその豫言を除りあてに致しませう。

さき程 湖上に笏こたえを傳へました音は

妾の父の吹いた號角ラッパの音だと思つたのでございませう。』



見知らぬ武士は微笑して云つた、――

『私は 誠實は老豫言者に豫告され、武者修業の騎士として、まれ疑ひもなく 大膽な事業を仕遂けるやうに定められてあなたの御家へ参る運命になつてゐたのですから、あなたのお美しい御眼から優しい一瞥を注いで頂くために私はどんなに危険な事業にでも直ぐ喜んで立ち向ひませう。そこで先づ その冒険の第一着手として あなたの魔の船を湖上を漕ぎ進めることをお許しなすつて下さい。』

少女は 男が慣れない仕事に骨を折つてゐるのをこつそりと人悪さうに微笑しながら見てゐた。

實際彼がその上品な手に船を執ると云ふやうなことは

これまでに殆ど一度もなかつたことであらう。

しかし技はなくも 唯だ力任せに船を動かすまゝに、

小船は湖上を飛ぶやうに進んだ。

獵犬は 首を持ち上げ 鼻聲を立てながら

小船の後から泳ぎ泳ぎ ついて來た。

そして漕手が船をあやつる力の烈しさに、

煌く船が薄暮の中に包まれ行く湖水の面を打つ度数も僅かにして、

彼等は早くも岩だらけな小島に着いて、

小船をその岸に繋ぎ泊めた。



見知らぬ武士は、岸邊を見廻した。

周圍には、矮林が隈もなく生ひ茂つて、

人が屢々其處に足を踏み入れたやうな、

足跡道も、小徑も見あたらな程であつたが、

やがて少女は一筋の、意外な處から這ひ上つて、

纏れ絡まつた藪の中を、うねうねと通つてゐる

小徑を取つて客を案内して行つて、

最後に枝を垂れた白樺や、丸く繁つた柳が

地上に長い枝を曳いてゐる、狭い草地へと出て來た。

其處には、誰か酋長か、まさかの時の隠れ場として

一軒の粗末な館を造つてあつた。

(かゝるケルト人の酋長等は、平常絶えず危難に脅かされ居たりしたため、必要なる時の世を忍び隠れ家として、吾が領内にて最も奥深き所に、種々なる形式の——秘密の避難所を作しなりき。)

二十六

それは仲々広い小屋であつたが、

その構造や、意匠は非常に變つてゐて、

その材料も、そのあたりに有り合せたやうなものからなつてゐた。

頑丈な櫛と、秦皮の

枝を切り拂ひ、皮を剥ぎ、

斧で粗く四角に截つて、

それ等を組み合せて、適當な高さに壁をしつらへ、

苔や、泥土や、木の葉を混ぜて、

それぞれの隙間を塞いで、風を防ぎ、

上には、細い松の木が



桶となつて 長く延び、

褐色の凋んだヒースと

枯れた蘭草で屋根を葺き、

また眞面には 幾らかの

近くの山から伐つて來た材木――

皮を剥がない縦の柱に高く支へられた

鄙びた玄關が草地に面して聳え、

其處には エレンが絡みつかせた

常春藤や 紅ミヤマスノキや

『處女の四阿』と云ふ佳い名のついた

人に好かれる花の 蝦夷女萎や

その他 キヤトリン湖上を渡つて來る

あらゆる丈夫な草木が植わつてゐた。

鋭い刺すやうな風に堪へられる

彼女は その玄關の處にちよいと立ち佇つて、

快活に 見知らぬ武士に云つた、――

『神様と あなたの『奥様』とに念じて

この魔の堂にお這入りなさいまし！』

(\* 中世紀の騎士が、あらゆる婦人の味方となることを誓ひ、各々我が思想の目標、我が愛情の支配者、我が行爲の指導者として、特に選びし一人の婦人――愛人を持つ事を以て彼の資格に必須なるものとせられ、彼女のために彼はあらゆる忠節、信義、秘密、尊敬の義務を守り、而して騎士にしてこれなきは、恰かも舵なき船、手綱なき馬も同然とせられたり。)

二十七

『優しい案内者の君よ、拙者は自己の身命を捧げて、

唯だ あなたの命維れ従ひませう。』

かう云つて彼か鬨を跨ぐと、――その途端に

腹立たしげに軍刀のがちやんと云ふ音がした



危険を豫期して 彼の大膽な顔にも思はず血が昇つたが、  
間もなく その音の原因が判つたので、――  
一振の太刀が 大きな鹿の角の上に  
不注意に抛け掛けてあつた鞘から抜け出て  
床の上に落ちてゐるのに気がついたので、  
彼は無益な驚きを恥ぢて顔を赧らめた。  
あたりには 戦争や 狩獵の分捕物が  
壁中に懸つて それを飾つてゐたからで、――  
此方には 楯、彼方には 號角と云ふ風に、  
軍用の斧や 狩獵用の槍や  
濶刀や 弓や 澤山の矢が  
牙のついた野猪の皮なぞと一緒に懸り、  
また一方には 狼の皮が 殺された時のまゝに齒を剝いて居り、

向ふには 山猫の斑の皮が 大鹿の目庇を飾り、  
或ひは野牛の角に被さつたりしてゐた。  
また 黒くなつた幾筋かの血痕を留めてゐる  
汚れ 損じた燕尾旗や 旌旗や、  
斑點や 褐色や 白色の鹿皮が  
河獺の皮や 海豹の皮と一緒に並んで、  
すべて 荒々しい異様な掛け氈毛のやうに  
寂しい林中の座敷を飾つてゐた。

## 二十八

途に迷ふた武士は訝りながら周圍を見廻して、  
それから 床に落ちてゐる軍刀を持上げたが、――



それを一杯に前へ伸ばし得る程の

屈強な腕を持つた人は滅多になからう。

彼はその重さを量り、またそれを振ると、かう云つた――

『戦場でこのやうな剣を使ふことが出来る程

強い腕力を備へた人は

私は唯だ一人(即ち、このエレンの父ダグラスを指す)しか知りません。』

エレンは溜息をついて、それから微笑して答へた、――

『其れは家の護りの勇士の剣でございますの。』

その人の手に掛ければ、それは丁度

妾が榛の若枝を弄ぶやうに軽く扱はれます。

またその人の體はフェラガスや、アスカバートのやうな

巨人の仲間入りでも出来る位に高うございます。

けれどもその人は今は不在でございます。

その城跡には唯だ女達と、年取つた召使ばかりしかるません。』

(何れも古き物語りに出づる巨人、前者は身長四十尺、二十人力にして、後者は身長三十尺ありき)

二十九

やがて、館の主婦(マアガレット夫人、エレンの伯母に)が出て来た。

年輩の、優雅な夫人で、

そのゆつたりとした歩態と、威嚴のある容子とは

宮中の人としても恥づかしくなかつた。

エレンは、伯母姪の間柄以上の従順と、愛情とを捧けて

實母のやうに彼女に仕へてゐた。

夫人は愛想よく客を迎へて、

その姓名も、門地も聞かなかつたけれども、



款待の限りをつくして、

丁寧 親切にもてなした。

(かゝる高地の人々は、殆ど極端に客あしらひのよき種族にして、客に饗應をなさざる前に、その姓名門地などを聞くは無禮と考へしと云ふ。)

これが當時の 客に對する禮儀であつて、

どんなに怨み深い敵でさへも、饗應に列して、

それが終つた時に 我が名を訊かれることもなしに

敵の家から無事に出られるためであつた。

到頭 客は自分の姓名と素性とを名乗つた。

『私はスノウダンの騎士、チェイムズ・フィツ・チェイムズと申す者でございます。』

勇敢な祖先が 代々屈せぬ武力を以て

艱難と闘ひながら保つて來た

不毛な領土の主でございます。

私の父は さう云ふ苦闘の中に倒れました。

私もまた 唯々自分の權利を擁護するために

屢々 止むなく劍を取つて立つたことがあります。

さうして今日は マリ卿の供人と一緒に獵りをして

一頭の丈夫な鹿を追ひましたけれども、失敗に終つて、

仲間にははぐれ、鹿をも見失ひ、乗馬は斃れ、

そして到頭こちらへ彷徨つて參つたのであります。』

三十

騎士は 自分の名乗りに對して 主人から

エレンの父親の姓名と身分とを訊きたけであつた。

年長の夫人の態度には 彼女が宮庭や 都にゐたことを

明らかに示すものがあつた。



またエレンの容貌には 山里の娘風の  
うぶな美が一層多く現れてゐたけれども、  
その言葉や 身振りや 姿や 顔附が  
彼女が名門の出であることを示してゐた。  
身分の卑しい人に かゝる容貌 かゝる舉止  
かゝる心を備へてゐるのを見るのは不思議である。  
スノウダンの騎士は色々と それとなく問を掛けて見たけれども、  
マアガルト夫人は 始終重く口を噤んで答へず、  
エレンはまたエレンで 無邪氣な申談で以て  
總ての間をば軽く受け流して了つた、――  
『妾達は魔女でございますの！ 町や 高樓から遠く離れて  
谷間や 丘の上に住む魔女でございますの。  
妾達は大水を堰き止め、大風に御し、』

武者修業の騎士を呪文で迷はし、  
また眼に見えぬ樂人の音樂の音につれて  
妾達はこのやうに魔の歌を唱ふのでございますの。』  
かう云つて彼女が歌ひ出すと、矢張り眼に見えぬ豎琴が  
何處からともなく 歌の間斷々々に妙音を送つて來るのだつた。

## 三十一

## 歌

『武士よ 眠れ、汝が戦ひは終りたり、  
破るゝことなき熟睡に沈め、』  
軍の場も 危険の日々も



明かせし夜半の夢をも見るな。

吾等が島の魔の廣間には

見えざる手ぞ 汝が床をのべ、

魔の樂の音は妙にひびきて

まどろむ五感を打ち安らげん。

武士よ 眠れ、汝が戦ひは終りたり、

軍の場の夢をも見るな、

破るゝことなき熟睡に沈め、

艱苦の朝 明かせし夜半の夢をも見るな。

荒き音は汝が耳には届かじ、――

武器の音も 駒の齒音も

軍隊を集め 隊伍を進むる

ラツバも 笛も 此處には響かじ。

さあれ曉來れば 曠地の方より

さやけき雲雀の歌も聞ゆべく、

蘆生う澤地より さんかの五位鷺の

太鼓の如き聲も聞えんも、

荒き響きは汝が近にはなく、

番兵も此處には 誰何の聲立てず、

馬の齒音も 嘶く聲も

兵士の叫びも 進む足音もなし。』

三十二

エレンは息を休めて――それから 顔を赧らめながら



その日の客にあてはまるやうに 歌の趣旨を變へた。  
彼女は 柔かな聲調で しばらくの間  
前の流暢な歌の調子を引きのばし、口ずさみつけてゐたが、  
到頭次ぎのやうな一曲が 立派に體をなして  
自然と譯もなく 彼女の唇から出て來た。

### 歌のつきよ

「獵夫よ 眠れ！君が狩りは終りたり、  
吾が眠りの歌の君に注ぐ間は  
夢見るなかれ 朝日のほらば  
起床ラツバの此處に響くことを。  
眠れよ、鹿は巢窟にあり、

眠れよ、犬は君が傍にあり、  
眠れよ、かなたの谷間に君が  
駒の死せるを夢には見るな。  
獵夫よ 眠れ、君が狩りは終りたり、  
昇る朝日の夢をも見るな、  
此處には黎明に君を醒ますべく  
起床ラツバの音も聞えざれば。』

### 三十三

座敷は片附けられた——客の寢床は  
山のヒイスを敷きひろけて作つてあつた、  
其處では よく澤山の客が身をよこたへて、



自分達の森の狩りを夢に見たのだつた。

けれども 今夜はヒイスの花も

客の頭あたまの周りにその曠野の薫りを無益に放ち、

またエレンの眠りの歌も 彼れの惱める胸の興奮を鎮めて、

安らかな眠りに就かせることは出来なかつた。

ちぎれ／＼な夢の中に 種々さまざまな危険や

様々な苦痛や 艱難かんなんの姿が現はれた、――

自分の馬が藪の中でもがき苦しんだり、

自分の小船が湖水の中で沈んだり、

或ひは 我が軍旗も奪はれ 我が名譽も失はれて了つた

敗軍の大將と自分はなつたりした。

それから、――あゝその夜の一番恐ろしい幻まぼろしは

どうぞ私（作者自身）を指すの夢には現はれないやうに祈るか！――

淡泊無邪氣にして、少しも疑ふ心なき

青春時代の舞臺に再び立ち歸つて、

その人の心はもう疾とつくに自分から離れてゐる友人に

再び自分の心の底を打ち明けたりした。

彼等はほんやりと 續いてやつて來たが、

皆な自分に對しては冷かな者が 不信な者か

或ひは既に死んでゐる者かであつた、

處が ほんの昨日別れたやうに その各々の手附は懇懇こんこんで、

その各々の顔附は快活で 愛想あいさがよかつた。

其れを見ると 彼の心は疑惑ぎわくに暮れた――

一體自分の知覺は正しいのだらうか 間違つてゐるのだらうか？

自分は死者の夢 或ひは誓ひを破つた者の夢を見てゐたのだらうか、

それとも又 總ては單に一場の幻まぼろしに過ぎないのだらうか？



最後に彼はエレンと一緒に林の中を歩きながら  
彼女に自分の戀を語つてゐるやうであつた。  
彼女は顔を赧らめ、溜息をつきながら聞いてゐた。  
彼れの求婚は熱切で、彼の希望は高かつた。  
彼れは女の抗はうともしない手を握らうとした。  
すると、意外にも冷たい籠手が手に入つた。――  
幻のエレンの姿は急に一變して、  
その頭には兜がかゞやき、  
その軀は徐々と大きさを増して來て、  
闇くなつた顔色と、威すやうな眼附と

灰白色をした、嚴しい、瘁猛な顔附をして、  
而も、なほエレンの顔に似た巨人となつた。――  
到頭、彼は眼が醒めて、恐怖の餘り喘ぎつゝ、  
その夜の幻を想ひ回して見た。  
火爐の消えかゝつた燃木は赤くちらつき、  
沈んだ、闇い光をあたりに抛けかけ  
部屋のはりに並んだ總ての異様な分捕物を  
朦朧と照らし出してゐた。  
それ等の間に、例の巨きな偃月刀が  
高く懸つてゐる處に客の眼は留まつた。  
さうして無数の思ひが、後から後からと續々出て來て、  
前の思ひを追うては、忙しく去つた。  
到頭、彼はぐらぐらした頭を鎮めるために



起き上つて、清らかな月光を求めた。

三十五

野薔薇や エグランチン(ばら屬)の花)や エニシダの花が  
豊かな薫りを空しくあたりに散じ、  
白樺は芳香の漲る中に枝を垂れ、  
白楊はこやなぎすらも静寂な空の下に眠り、  
廣い 静かな湖水の面おもてには  
銀光がちらちらと顫ひきらめいてゐた。  
この落着いた光りの中にあつてすらも  
なほ興奮の鎮まらぬやうな心ありとせば、それは常軌を逸してゐるだらう。  
軍人の客は この静けさに心も鎮まつて、

かく胸中 深い思ひに耽つた、――

『何方どこへ向いても あの追放した一族(エレンもその一人)なるダグラス家)のこことを  
何か思ひ出すものに出會すと云ふのは何故だらう？

この山國では ダグラスの眼に似てゐない眼をした少女は  
一人も見附けることは出来ないのだらうか？

この『高地』では ダグラスの腕に適あははしい劍ほの他には  
一振の劍も見附けることは出来ないのだらうか？  
おまけに 悪夢を見ると 何故依然として

ダグラスがその主題となるのだらう？

いや、もう自分は決して夢は見まい、――

男子は、眠りの中でも自分の意志は譲らないものだ。  
自分は夜中の祈りを唱へれば、  
寢床ねどこに就いて、もう決して夢は見まい。』



彼は 黄金の珠數をつまさぐりながら  
夜半の祈りを唱へて、

我が心配も 悲哀も皆な神に任して、

安らかに眠り續けることになつた、――

曠地の方より松鷄の叫びが聞え、

ヴェヌウ山上の空が仄々と明けはじめるまで。

## 第二篇

### 湖上の小島

一

朝には 蝦夷山鳥の雄はその漆黒い翅を啄き揃へる、

また紅雀に いたも楽しい歌を唱はせるのも朝である。

生きとし生ける物は 日の更まると共に

更まつた生の 所しい活力を感じるものである。

さうして小船が 歸路につく昨夜の客を送りつゝ



入江の波を分けて滑つて行く間に。

朝の爽かな氣は老樂詩人(中紀世の頃、諸侯または豪族などに仕へて、詩を賦し、音樂を弾じて、彼等を樂ましめ、或は慰むる一種の伶人。)を勵まして、響く豎琴の音とともに お前の歌は

湖上に美妙に傳つて行く、あゝ白髪の老人アラン・ペイン(ダグラス家に仕ふる老樂詩人)よ!

二

歌

『往にし日受けし恩惠の

人の胸より消ゆること

彼方の漕手の櫓より水沫の

飛び散るよりも尙ほ速し、

船行く跡に輝けく

光り漂ふ小波の

消え行くよりも尙ほ速し。

さらば客人 行けよかし、船路安けく、

思ひな出でそ 寂しきこの島を。

『禁中にも位高く、』

戦場にも地位高く、』

獵には 好き犬 好き鷹を伴れ、』

美人の臨む競武の場には

榮譽の賜物受けよかし。

君が劍は忠實に、君が友は心正しく、』

君が夫人は心優しく、操は高く、』



愛と情の微笑の中に  
忘れや 寂しきこの島を。』

三

歌のつよき

『されども南國の君が地に  
縞の衣を身に纏ひ、頬やつれ 眼は曇り、  
首うな垂れつ 溜息をつき、』  
『高地』の空を慕ひつゝ  
我が里人の彷徨ふ見れば その時は、  
君 武士よ 心して

慰めよかし そが悲しみを、  
思ひ出せよ 寂しき島に  
ありにし時の幸福を。

また 世の定めなき海原に  
禍 君が帆をさまたけて、  
誠實も 智慧も 雄々しさも 皆な甲斐なく、  
常なき嵐の中に 追放や  
憂きや 貧苦に憫むとも、  
變りし運命や 情なき主君や  
友を怨みて 徒に過ごすな。  
來れや 君に適はしき  
人住む 寂しき此の島に。』



彈唱の音が湖上に消えた時に、  
小船は陸地に着いた。

見知らぬ武士は 歸路を急ぐ前に、  
島の岸邊の方を名残り惜しげに見返ると、

其處には老樂詩人の姿が  
直ちに彼の眼に入つた。

老人は 彼れ自身のやうに萎び衰へた  
灰色の枯木に凭りかゝつてゐるが、

丁度 昇る朝日から 靈感の火を燃え立たせる  
火花でも求めやうとするやうに

尊さゝうな額を空の方に向けながら  
深い詩想に沈んでゐた。

堅琴の絃の上に置かれた彼れの手は

その靈感の火の燃え上るのを待つてゐるやうに、  
宛ら 死刑の宣言を待つてゐる罪人のやうに、

またその白髪の毛一筋をも風はよう動かさうともしない位に、  
否や 彼れの堅琴の最後の音とよもに

生命そのものすらも去つて了つたかとも思はれる位に靜かに坐つてゐた。

彼の傍には 青々と地衣に蔽はれた岩の上に  
エレンが座りながら 微笑んでゐた、――



それは 物々しい雄鴨が 澤山の雌鴨を従へて  
湖上を進んで行くのを見て、彼女の獵犬が口惜しがつて、  
この手の届かない獲物に向つて  
たゞ無益に岸邊から哮へてゐるのを見たので 笑つてたのだらうか？  
では 何故彼女の頬に紅葉が散つたのか、  
それを知つてゐる少女があれば 教へて貰ひたい。――  
あゝ貞操よ、どうぞ宥してくれ！――  
（エレンは、後に出づるマルコムなる青年と  
戀仲なり、故に作者はこの一句を添ふ）  
恐らく彼女は 去らうとして 去り兼ねる客が  
向ふから告別の手を振り また立ち停まつて 振り向いては  
再び手を振るのを見たから 笑つたのであらう。  
併し 世の婦人方よ 御身達がこれに腹を立てよ、  
私の歌の女主人公を責める前に、  
若し 自分の美しい眼に魅せられた男の立ち去り兼ねてゐるのを

願見もせず 平氣でゐる少女があれば それを教へて貰ひたい！

## 六

騎士が猶ほその場に低徊してゐた間は  
エレンは彼れを氣に留めてゐないやうに見えた。  
しかし彼れが林の中の通路へ曲り込まうとすると  
彼女は丁寧<sup>わづか</sup>に告別の合圖をした。  
――その後 この騎士が屢く云つたことであるが、――  
競武場で 寶石で髪を飾つたやうな名門の婦人中での  
最も美はしい女から賞品を貰つた時ですらも、  
今の 此の簡単な無言の告別のやうに  
彼の胸の高く踊つたことはない



(中世紀頃行はれし Tournament 擬戦、或ひは競武會に於いては、勝利を博せし者は名門の婦人の手より賞品を受くる習はしなりき。)

かくして彼れは 忠實な山國の案内者に導かれ、

黒毛の獵犬を傍に引き伴れて去つた。――

エレンは 彼れが小山をそろ／＼と曲つて行くのを

尙ほ我れ知らず 見守つてゐた。

處が 彼れの威嚴しい姿が消えてしまふと、

初めて胸の守り神は彼女を咎めた。

『妾は何と云ふ虚榮な 我儘な女だらう！』と

かう良心は嚴しく叱責した――

『マルコムは このやうに愚かしくも南國の女の

甘い言葉に 熱心に耳を傾けはしないだらう、

また このやうにお前以外の女の姿を

瞳をこらして見ることもしないだらう。』……

『これ アランや、起きなさい』と彼女は

自分の傍にゐた老樂詩人に呼びかけた――

『その陰氣臭い夢から醒めておくれ。』

妾はお前の豎琴の曲に 勇ましい歌の題を云つて上げるわ、

そして ある尊い名前を云つて お前の心を勵ましてあけてよ、

ねエ グリイム様の讚美の歌を弾いておくれ！』

グリイムと云ふ言葉が彼女の口から出るや否や

少女は氣がついて深く顔を赧らめた。

何となれば 若いマルコム・グリイムは

男も女も 彼の氏族の花と考へてゐたからである。



樂人は堅琴を鳴らしはじめた、——  
名高い軍の曲を三度弾いて見たけれども、  
三度とも その崇高勇壯な歌曲は  
憂鬱な呟き聲となつて消えて了つた。

『御嬢様、駄目でございます』と 老人は萎びた腕を扼しながら云つた、  
『あなたのお望みに叶へなかつたやうな例は

これまでに一度もありませんのでございますけれど、

今日は全く駄目でございます。あゝ！誰れか私よりも偉いものが  
この堅琴の調子を整へ その絃を指で觸れ廻つたのでございます。

私は歡びの調を鳴らして見ましたけれども、

答へるものは 低い 泣くやうな 悲しみの調でございます。

凱旋式の行列の歩調に合はす 勇ましい行進曲も

死者を嘆く慟哭の聲と變つて了ひました。

この挽歌のやうな 陰鬱な琴の調子に含まれた死の豫言が  
單に私の身に關してゐるだけならば 結構なことでございます！  
私の前に此の堅琴を弾いた樂人達の申しましたやうに（樂人は世襲的、  
モウダン上人様が初めて弾かれたこの堅琴が  
かうしてその主人の運命を豫示するのならば、  
私はその吊ひの鐘の音を喜んで迎へませう！』

八

『併し、あゝ！御嬢様、あなたの阿母様がお亡くなりなさる晩にも  
この樂器はこのやうに悲しい音を立てたのでございます。  
また ダグラス様御一家が御没落なされて、  
本國追放の御不幸にお逢ひなさる前でございます——』



私が軍や 戀の歌を奏かうと努めるにも拘らず

饗宴の樂しさをすつかり破壊して了ひ、

其れを奏で出した私自身を驚かし、

少しも秘の云ふことを聞かず、

ボスウェル城内の旗で飾つた廣間中に

號哭するやうな響きを傳へたのもかう云ふ音でございましたのぢや。——

あゝ！若しも我が御主人様の御一家に

なほ大きな不幸や 禍が降つて來るとか、

または今の絶望の調が お美しい御嬢様の御身の上に

何か不幸な事の起ることを示すのならば、

惨めな豎琴よ、お前の絃では 俺の後の何の樂人にも

勝利も 歡びの歌をも弾かさすまい。

最後の どんな短かい一節でも、

云ふに云はれぬ悲しみに充ちた音を出すのならば、  
俺はお前を粉々にぶち壊して、

お前の主人もまた打倒れて 死んで了ふぢやらう。』

九

エレンは老人を慰めながら答へた、——『これアランや、

氣を落着けなさい、——それは年寄りに有り勝らな杞憂に過ぎないのよ。

『低地』の平野でも『高地』の谷間でも——蘇格蘭の南から北の端に至るまでも、

豎琴に奏かれ 笛に吹かれるものならば、

どんな曲でもお前は知つてゐるのだから、——

記憶の中にごつちやになつて入つてゐたために、

それが迷り出る時に 時としては



葬式の歌が 軍の行進曲と混ぜこねになつて、

求めもしない曲が出て来ると云ふのが 何で不思議だらう？——

今は 將來の不幸を豫想して心配するやうな理由は少しもありません。

妾達は世の中から埋もれてゐるけれど、此處で安全に暮らしてゐます。

妾の阿父様は生れつきからお偉い方なから、

たとへ爵位や 權威や 領土やは お捨てになつても、

丁度向ふの櫨の木が風に屈しないやうに、

天爵をもお捨てになるやうな方ではないのよ！

たとへ優しい木の葉は 嵐にもぎ取られても、

丈夫な幹は 嵐も害ふことは出来ないんだから。

また妾は……』と云ひさして 彼女は俯向いて、足元を見廻して、

地面から一本の青い山小菜を摘み取つて、——

『また妾は 自分の過去の何處をふり返つて見ても、

殆ど少しも記憶えてゐないけれども、

野山の草地を愛するこの小さい花をこそ

自分の似合はしい表象とするわ。

これも王様の御庭に生えてゐる薔薇と同じやうに

清らかな 天の露を吸つて生きてゐるのだから。

また 妾がこれを髪に挿すと、

ねエ アランや 樂人達は屹度

こんな美しい花冠は決して見たことがないと云ふだらうよ。』

かう云つて彼女は小さい野生の花を

我が黒髪に巻きつけて、そして微笑つた。

+



彼女の 魅力のある微笑と 言葉とは

老樂詩人の陰鬱な氣分を拂ひのけた。

彼れは 丁度尊い隠者が 彼れの不幸を慰めやうとして、その上に屈んでゐる  
天使を見上げるやうな眼附をして彼女を見詰めたが、

到頭 彼女を愛憐しむ深い同情と 彼女に對する誇りとは  
凝つて 熱い涙となつて流れ出て それからかう答へた、――

『實に愛らしい 氣高い方ぢや！あなたは御自身が

どんな地位と榮譽とをお失ひなされたかを少しも御存じないのぢや！

あゝ 私に老の命があつて、御嬢様が蘇格蘭の宮庭で

御自分の本然の地位をお飾りになり、

宮中の舞踏會では一番輕快に動く

あなたの美しいお足の進む様や、

あなたが總ての勇ましい武士の憧憬の的となり、

あらゆる人の眼の中心となり、

あらゆる樂詩人の歌の題目となられるのを見たいものでございます。

あゝ 貴きグラス御家の御姫様よ！――

## 十一

『そんな事はたゞの美しい夢よ』と 少女は叫んだ。

(その語調は氣輕さうだつたけれども、さすがに溜息が洩れた。)

『しかし 妾には此の苔の生えた岩も

華美な椅子や 天蓋と同じやうに心地よく、

また妾の脚は 優雅な宮邸舞踊を踊る時よりも

愉快的な田舎踊りを踊る時の方が却つて輕快に動くでせう、

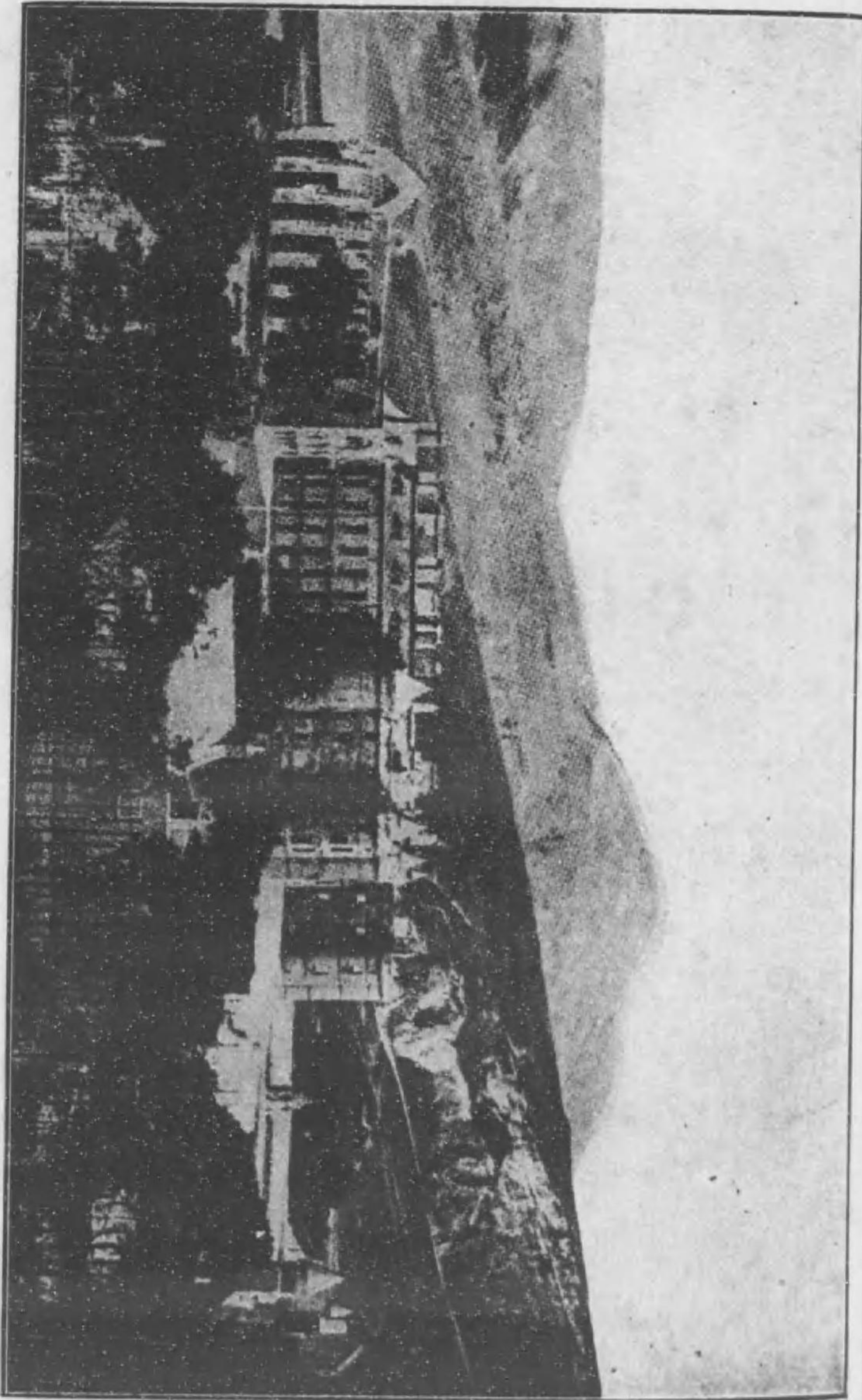
また私の耳は 宮中の伶人の音樂を聞く時よりも



お前の音楽の聞く時の方がずっと愉快に感じるでせう。  
それから又、妾の前に恭々しく身を屈める  
高慢な身分の高い、妾の求婚者に就いては——  
口の旨いお前は、あの恐ろしい顔をしたロデリク様も  
妾の手の中にあることを承知してゐるとおつしやるだらう。  
『ロオモン低地』人の禍根で、アルビン族の誇りで、  
またロオモンド湖地方の恐れまどの的であるあの人も、  
ねエ、アランや、妾がお頼みすれば、——  
レノクス(ロオモンド湖の南端地方の豊饒なる地域)へ侵入するのを——一日も延ばすだらうよ。』

## 十二

老樂詩人は急にまじめになつて云つた——



(六) ホーリ・ルカド宮の景  
(第八十九頁、第三百〇八頁、参照)



「あなたは悪い事を御冗談の種にお撰びなすつた。

この西方の曠地の何處へ参りましても、

黒いロデリク様の御名前を

笑ひながら口にする人は一人もございませんのぢやから！

いつぞや ホーリ・ルウド（蘇國エゲンバラにある蘇格蘭國王の宮城の名）で あの方は

一人の騎士をお殺しになつたことがございますが、

私は あの方が短刀を鞘にお戻しになつた時に、

朝臣達はこの大膽な殺人者の濶歩から

おづくくと路を譲つたのを見たことがございます。

そして 其れ以來 法律の保護を奪はれてるますけれど、

この山國の御領地をば御自分の手で固く保つて、

また——あゝ！こんな厭な事實を申さねばならんと云ふのは

何といふ悲しいことでございますう！——



傷ついた鹿が仲間から見棄てられるやうに。

(傷つきし鹿は仲間の鹿より見棄てらるゝものにして、若しそれに加はらんとすれば、仲間より迫害せられ、時には殺さるゝと云ふ)

あらゆる貴族社會の方からお見棄てられになつたダグラス様にお粗末とは云へ、このやうな隠れ家

あの方以外には誰方が與へて下さるでございませう？

あゝ、御自分の危険を賭しても、私達を庇護つて下さるのは

誰だこの驍悍殺伐な若君だけでございます。

さうして今や御嬢様はこのやうにお美しく御成人なすつたから、

あの方は其の御返報として、あなたと御結婚なさらうとしてゐらつしやるのでござい

ます。

それで御従妹様との御結婚の特許を得るために(ローマ教會にては、

羅馬法王様の御許へお遣りになつたお使者は

直ぐにその特許を齎らして歸つて参るでございませうから、

さうなれば、あなたの阿父様は

寂しい山國に御配流の御身ながら、ダグラス御前様として

依然として畏れ敬はれなされることとございませう、

またロデリク様はあなたを非常に愛していらつしやるから、

あなたはこの恐ろしい酋長様を御自分の奴隷のやうに

絹糸で自在に操ることも出来るでございませう。

けれども御嬢様よ、御用心なさいませよ——お笑ひ事でございませんよ。

あなたは獅子の鬣に御手を置いてゐられるやうなものでございます。』——

十三

『アランや！』と、少女は答へたが、その眼からは

彼女の父親から受け繼いだ勇ましい、きつとした色が輝いた。



「妾がロデリク様の御一家から受けてゐる御恩は  
妾もよく知つてゐます。マアガレット伯爵様からは  
妾の御母様がお亡くなりななつて以来、

眞實の御母様から受けるのと同じやうな御世話をして戴いてゐます。」

また蘇格蘭の王様の御怒りから

妾のお父様をお庇ひ下すつた勇ましいその御子息様には  
なほ更深い 尊い御恩を受けてゐます。

だから 若しも妾が自分の血で其れをお返し申すことが出来るのならば――

アランや――ロデリク様は 妾の血をも 命をも

自由にすることが出来るだらうよ。――

けれども妾の愛は自由にすることは出来ないのよ。

自分の愛することの出来ない男と結婚する位ならば、

妾は寧ろ熱心な信者となつて マロナン(ロオモンド湖の東端に位する地名)の庵で暮すが または

遠く海を越えて、世間の冷たい同情を求めながら

蘇格蘭の言葉は一語も話されず、

ダグラスと云ふ名も少しも聞えない遠い國々を

寄邊もない巡禮となつて彷徨つた方が ずつとましですわ。

#### 十四

アランやお前は白髪頭を振るのねエ――。

お前の抗ふやうな顔付を見て、

その意味が妾には判らないだらうか！――

ロデリク様の勇敢なことは妾も否みません。

けれどもそれはブラツクリン(既出メンチイスのキマランダ村の近くにある美しい小瀑布)の轟く浪のやうに亂暴だ  
わ。



また復讐の念や 嫉妬心が

烈しく血を湧き立たせる場合を除いては、あの方は寛大でせうよ、  
またあの方の剣が、あの方に忠實な様に

あの方が友誼に厚いことも、妾は否みません。

けれども、あゝ！その剣の双先こそは

もう少し敵に對して情深かつてくれ、ばいゝわ。

またあの方が『低地』地方に侵入して、

前には美しい村の並んでゐた處には

唯だ血に塗れた灰の山だけを跡に残して、

湖水を越え、谷を越えして、戻つて來た時に、

掠めて來た財物を一族の間に分つことにも

物惜しみをしないことは、妾も否みません。

妾の阿父様のために戰つて下すつたこの方に對しては

妾は當然ダグラス家の娘として尊敬してよ、

けれども、我が小屋で虐殺された百姓達の

生血の臭ひのしてゐる手に、妾は縫ることが出来るだらうか？

あの人的美質は折々不規則に、荒々しく輝くけれど、

それはあの人への煩惱を却つて一層暗く見せ、

あの人への不敵な性質を益々恐ろしく見せる。

丁度闇夜の空に閃めく雷光が、暗夜を一層暗く見せるやうに

まだ小供だつた時分から——小供と云ふものは

本能的に味方と敵とを知り分くるものだが、——

妾は、あの人への陰鬱な眉や、黒ずんだ格子縞の外衣や

黒い飾羽毛などを見ると、身顫ひをしてゐたのよ、

また大きくなつてからは、あの人への傲慢な態度や

豪さうな容子は、殆ど見るもいやになつたのよ。



だからお前までが本氣になつて 他の求婚者並に  
ロデリク様が妾と結婚しやうとしてゐるなど云ふのならば、  
妾は煩悶の餘り、或ひはダグラス家の者としては不似合だけれど――  
恐怖の餘り、身顛ひをするわ。

もうこんな厭やな話は止した方がいゝわ。――

時に お前は あの昨夜の見知らぬ御客様をどう思つて？――

### 十五

『あの御客様を何う思ふかつておつしやるのですか？――

あゝ、あゝ云ふ見知らぬ人がこの島へ來たと云ふのは 誠に不幸なことではございませぬ。

御前様の軍刀は 昔タイム・マン様(ダグラス家三代)の目(ダグラス家三代)の伯爵(ダグラス家三代)のため

魔術の力で鍊へ上げたものでございますが、

此の方がホットスバア様(蘇國、ノアスアンブラン)と御和解をなすつて、

ホットバア様が英蘭の王様に反旗を翻へすのをお扶けなさるために

同盟を結ばれた時に、此の劍がひとりでに鞘から抜け出て、

敵がこつそりと近づいて來るのを豫示したことがございます。

若しも蘇格蘭の王様の間諜が御家で宿を取つたとすれば、

ダグラスの御家に取つて、また古いアルピン御一族の

一番確かな 最後の御避難所とせるこの島に取つて

何んなに御心配なことだか判りませぬ。

また あれが間諜でも 敵でもないと思はれますれば

嫉妬深いロデリク様は何うおつしやることではございませう？――

――いや、そんなに事もなげに御頭をお振り遊ばすなよ、

いつぞやベルティン祭(五月一日、或ひは其の前後に)の御遊戯の際に



あなたがマルコム様と踊りの音頭をお取りなすつた時に、

お二人の間に何んなに恐ろしい御争ひが起つたかをお考へなすつて御覽なさい、御前様がその御争ひを御仲裁なすつたけれども、

ロデリク様の御胸中には、猶ほ怨みの念が潜んでゐるのでございます、御用心なさいませよ。……オヤ、お聞きなさい、あれは何の音でございませう？

私の鈍い耳には、そよ吹く風の音も聞えませず、

しなだれた白樺も、白楊もそよいでるませず、

また湖水の面には少しも小波は立たず、

油茅の白い穂さへもぢつとして居ますのに——

私は確かに聞いたのでございます——

ソレ、またお聞きなさい——誰かど遠くから軍の風笛で、

勇ましいビイプロホ曲（スコットランドの高地人が「バグ・パイプ」を吹いてゐるのでございますよ。）」

## 十六

廣々とした湖水の面の遙か彼方に

四つの黒い影が浮んでゐるのが見出されて、

それが近づいて来るにつれて、徐々に大きさを増して、

やがて人の乗り組んだ四艘の帆前船となり、

グレン・ガイル（キヤトリン湖の頭）から此方へ下つて、

寂しい小島を眼がけて眞直に進んで来て、

ブライアンコイル（キヤトリン湖の北岸、小島の少し上手にあり）の先きを通り、

風上の方に舷側を向けた時には

勇ましい、ロデリクの旗印しの「松」（ロデリクが統ぶるアルピン氏族の定紋、或ひは飾章）を朝日に美しく輝かした。



それから船が段々と近づいて来るにつれて、  
槍や 矛や 軍斧が空中に煌めいたが、  
やがて華かな色をした格子縞の着物や  
縞羅紗の外衣や 羽毛飾が踊りつ、ゆらめきつするのが見られた。  
見よ、漕手が丈夫な橈を熱心に操るまゝに  
帽子が上つたり 下つたりするのや、  
見よ、力強く橈を一棹する度びごとに、  
波が水煙となつて閃めき 飛び散るのも見え、  
また、舳先に立つてゐる凛々しい吹奏者の姿や、  
湖上を分けて 勢烈しく進み行くにつれて、  
彼等が古い『高地』の歌曲を奏する時に、  
樂器の華かな飾りのリボンが  
幾條も風笛の管からひら／＼と垂れさがつて、

ゆらめく湖水の面を拂ふのも見る事が出来やう。

## 十七

船が小島に近づけば、近づく程  
勇ましいパイプロホ曲は益々高く響き渡つた。――  
最初は其の音も 遠距離のために弱められて  
湖上を嬾々と靜かに傳つて来て、  
洞穴や 入江のあたりに長く彷徨ひつゝ、  
總ての粗い音を消してゐたが、  
聴て忽ち音高く 人の耳朶を折ち、  
『氏族集合』の鋭どい相圖と聞きなされた――  
古いアルピン氏族の武士どもを



軍に呼び集める。その耳を劈く懐かしい響きと。  
次ぎには恐ろしい集合の合圖を聞いて馳せ集まる幾百の兵士が  
谷間を揺がせつゝ大急ぎで駆けつけ、  
踏まれる大地はそれに答へてこだまし返す時のやうに  
風笛の曲調は繁く、矢繼早に響き渡つた。  
それから、軍隊の勇ましい進軍を示す  
一層輕快な序樂の活潑な曲調が初まり、  
次ぎには、接戰の初めのどよめく音が  
入り亂れた叫び聲や、喚きや、打撃の音と共に起り、  
同時に、濶刀が楯にがちやりとぶつかつた時の  
切込と、受け止めに似た騒音や、  
また、唸るやうに、音はしばらく途切れたかと思ふと、  
次ぎには再び矢叫びの者が密集して烈しく鳴響き渡り、

急激な突撃や、再び群がり起る喚聲や、  
しどろもどろに崩れ立つた退却や、  
アルピン氏族の勝利を告げる歡呼の聲など、  
——總て此の風笛の音の中に含まれてゐた。  
また、その曲はこれだけでは止らず、  
徐々と、長い、低い愁嘆に沈んで行つて、  
凱歌を奏する、勇ましい喇叭の響きは  
戰場に倒れた勇士を悲しむ、烈しい慟哭の音と變つた。

## 十八

軍の笛の音は終つたが、湖水や、岡は  
なほ頻りと、その反響を傳へてゐた。



さうして その反響もやがて消えて了ふと、  
今度は嗚れ聲を上げて叫ぶ人の合唱がそれに代り、  
數多の氏族の者は 聲も高らかに  
我が酋長に對する讚美の歌を唱ひはじめ、  
各々の漕手は 必死に櫓をあやつりながら  
漕ぐ手 曳く手に調子を合はせつゝ  
十二月の枯木林の 朔風に打騒ぐやうな  
荒くれた調子で 他の者に聲を合はせ、歌の疊句を合唱した。  
『アルピンの君 ロデリク公よ アー、イヤサー』と云ふ合唱を  
アランは最初に聞き取ることが出来た。  
そして 愈々近く漕ぎよせて來るまゝに、  
軍の歌は益々明かに響き渡つた。

十九

挽歌

勝ちつゝ進む吾が君 萬歳！

常緑の『松』よ、譽れと、幸あれ（松はアルピンの族の紋章）！  
ひらめく旗の上の『松』よ 長久に

榮えよ 我等が護り 誇りとして！

天は妙なる露 送れ、

地は新たなる養液を、

楽しく芽生え、廣く蔓れ、

あらゆる『高地』の谷々の



吾等が斯く呼ぶ喚聲に答ふ間に――

『アルビンの君　ロデリク公よ、アー、イヤサー!』

我が木はたまく水邊に生れ、

春　花開き、冬　枯るゝ若木にあらじ。

朔風　山の木の葉を拂ふとも、

吾等を護る『松』は愈々影深し。

裂かれし巖に根は固く、

烈しき嵐にも幹強く、

風吹き荒ぶ度ごとに　根はいや深し、

さらば四方の野に　山は

君をたゞうる歌に飜せん、――

『アルビンの君、ロデリク公よ、アー、イヤサー!』と。

二十

我が笛の音は　フルウインの谷を顛はし、

我が勝鬨に　バノハアの呻きは答へ、

ロス・ドウに、ラスの谷間は火焰に亡び(以上の谷間、其他何れもロス、モンド湖の西南の近くに位す)、

ロオモンド湖畔の英雄も　其處に屍かばね　さらせり、

南國の寡婦　女兒は

長く吾等が入寇をば怨み、

アルビン族を思ふごと　嘆き恐れん。

レノクス\*の野に　リイヴエン谷も\*

かく叫ぶを聞かば、身顛ひしなん、――

『アルビンの君　ロデリク公よ、アー、イヤサー!』



(\*\*ロオモンド湖の南方の地域、及びリイグエン川流域地方を含む地名)  
\*\*ロオモンド湖とクライド河とを結びつくる河)

漕げや 諸人、『高地』の誇りのために！

努めや 諸人、常緑の『松』のため！

彼方の島の飾りなる蕾の薔薇よ、

わが『松』飾る花環となれよ。

あゝそが幹にふさはしき

緑の若芽 萌ましつ、

親木の影に 尊く 目出度く榮えかし！

さらばアルビン族の諸人は

谷底よりも かく叫びなん、——

『アルビンの君 ロデリク公よ、アー、イヤサー！』と。

(末節はエレンがロデリクと結婚して、アルビン族の)  
(酋長の家に、良き子孫を儲げんことを祈れるもの。)

二十一

悦しさうな總ての女の群と一緒に

マーガレット夫人は既に岸邊に立つてゐた。

そよ風に 氣儘に髪をもてあそばせ、

雪を欺く白い手を高く振りかざしながら、

彼等は 甲高い歡呼と 烈しい合唱で

酋長の名を稱へつゝ 男達の歌に唱和した。

その間に 夫人は我が子の切ない戀情を

一時も早く満足させたい 母親の巧計から、

従兄が上陸しない前に 彼に挨拶をさせやうと

エレンを岸邊へ來るやうに呼んだ。——



『愚圖々々しないで、速く此方へお出でなさい、お前さんはダグラス家の娘でありながら、何故戦ひの勝利者を歡んで迎へないんです。』少女は、澁々として、歩みも遅く、好ましくない招きに従つた。處が、ふと遠くから號角の音が聞えて來たので、彼女は來る途中でひらりと方向を轉じて、——『アラン爺や、あれお聞き、向ふの陸地から阿父様の御合圖の號角の音が聞えて來るわ。だから妾達は小船を出して、阿父様を山邊から此方へお乗せ申して歸るのよ。』それから彼女は矢のやうに疾く、いそぐと自分の小船の方へ飛んで行つて、

ロデリクがその懐しい姿を見附けやうとして、母親の伴の女連の中を熱心に見廻してゐる間に、少女は既に遠く小島を後にして、向ひの入江に上陸してゐた。

## 二十二

人間には、人間的と云ふよりも寧ろ神のやうなある尊い感情も授けられてゐるもので、若し、純潔にして、情慾の汚れに染まず、天使の頬をも穢さないやうな尊い、清い涙が人間にもありとすれば、それは、世の優しい、敬虔な父親が



孝心深い娘のために注ぐ涙であらう！

そして今ダグラスが 我が愛娘のエレンを

自分の胸に轟と押しつけた時に、

遺が英雄の眼からも はら／＼と流れ出て

彼女の髪を濡らした涙こそは かゝる神聖な涙であつたらう。

また エレンが吾が舌の先に群がつて来る

親に會つた歡びの言葉を口籠つてゐる間には、

彼女は 一人の氣高い青年が 遠慮から（それは愛情の印だが、）

遠く離れて立つてゐたことには氣が附かなかつた。

いや、それはマルコム・グリーンではあつたけれども、

ダグラスがその名を云ふまでは氣が附かなかつたのである。

二十三

アランはその間 ロデリクが島に上陸するのを

遠くから物思はしけにして眼を留めて見て、

それから 我主人を氣の毒さうに眺め、

また ロデリクの豪勢な様子を見詰め、

さうして曇つた眼の中に溢れ出る涙を

急いで手で拂ひのけた。

するとダグラスは マルコムの肩に

手を置きながら 優しく云つた――

『あなたは あの老人の涙に輝いた眼を見て

何の意味をも悟ることは出来ませんか？



ぢやア私がそれを云つて上げませう——

彼は 殺傷算なき戦闘の後 分捕つた

バアシイのノオマンの軍旗が私の前に翻つて、

少なくとも あのロデリクに劣らないだけの

名聲を有してゐた二十人ばかりの騎士が

私の行列に美を添へて 私に従いて來た時に、

あの老人がボスウエル城の壯大な弓形の門の上で

私の讚美の歌を弾唱し、

同時に澤山の樂人が調高く其れに伴いて歌つた

あの盛んな凱旋式の日の事を憶ひ出してゐますのぢや。

しかし マルコムさん、實の處を云つて、

銀色の新月旗(銀色の新月を紋章とせ  
るバアシイ家を指す)は私の偉力を認め、

また私の行列には澤山の貴族や騎士が加はり、

ブランタイヤ僧院(クラオド河を隔て、  
ボスウエル城と面す)では一番尊い讃歌を歌ひ、

ボスウエル城の樂人達はそれに答へるやうに

私の讚美の歌を唱ひつゞけた時の

あの總ての華々しい行列に對する私の誇りも

今 此の老人が無言の涙をそそぎ、

この可憐な少女が 深い愛情を傾けて

私が世にときめいてゐた時に受くべき歓迎よりも

一層優しい 一層真心のこもつた歓迎をしてくれた時の

私の誇りには比べられませんのぢや。

いや、あなた、老父のつまらぬ娘自慢を許して下さい、

併し あゝ！これに比べては、私が今失つてゐるものなどは

總て何の價値もありませんのぢからなア！』



いかにも嬉しい讚辭である、――

父親がかく語り、而かもマルコムが其れを聞いてゐるので、

はにかんだ少女の頬は、朝露を浴びて一層美しく輝く

初夏の薔薇の花のやうに見えた。

嬉しいけれども、恥かしい、頬の赧らみを隠さうとして、

彼女は獵犬や、鷹を頻りに玩弄ぶやうに見せた。

獵犬は、彼女の優しい愛撫に對して

媚びるやうにかしこまつたり、鼻聲を立てたりし、

鷹は、彼女が口笛を吹くと、

嬉しさうにして彼女の手に棲まつて、――

黒い翅を固くすほめ、眼をうつとりとさせ、

眼隠しはしてゐないけれども、飛ばうともしなかつた。

かうして彼女が、宛ら森の精のやうに

いかにも美しい姿をして立つてゐるのを見ては、

たとへ彼女の父親は子煩悩な偏頗から

彼女の價値と美とを幾らか誇張して云つてゐたにしても、

それ等を更に精確な判断の秤にかけて見ることは

彼女の戀人には出来ないのは、實際無理からぬことであらう、

何故と云つて、この戀に熱した青年は

そつと彼女を盗み視る度毎に、自分の切ない思ひを相手に守せてゐたからであらう。



マルコム・グリームは丈高く、すらりとして、  
而もがつしりとした青年であつた。

こんなに優美な四肢が、帯をしめた縞羅紗の上衣と  
格子縞の靴下とに包まれたことは決してなからう、

彼れの明るい艶やかな亞麻色の髪は

その青い帽子の周りに濃く渦を巻き、

狩りに熟練したその鋭い眼は

積雪の中にある眞白い松鶏さへも見付けることが出来る程で、

また レノクスや メンチイスを通じて、

山間や 湖畔や 曠野の何の路もよく知つて居た。

若し彼がその鳴りの強い弓を張る時には、

如何に敏捷な牝鹿の疾走も無益で、

たとへ其れが恐怖の餘りに死物狂ひになつて飛走しやうとも、

この素早い山人の足を駆け抜け得ることは滅多になかつた。

また彼が獲物を追ふてロオモンド山を眞直に駆け登つて行つても、  
疲勞のために喘ぐやうなことはなかつた。

その心もまた その姿に相應して、

快活で 熱烈で しかも淡泊で 親切で、

エレンに逢ふまでは、これ位快活な心で

これまで戀の惱みに悩まされたものは決してなからう。

其れは丁度兜の飾毛のやうに

彼の胸の中に快活に踊つてゐたのである。

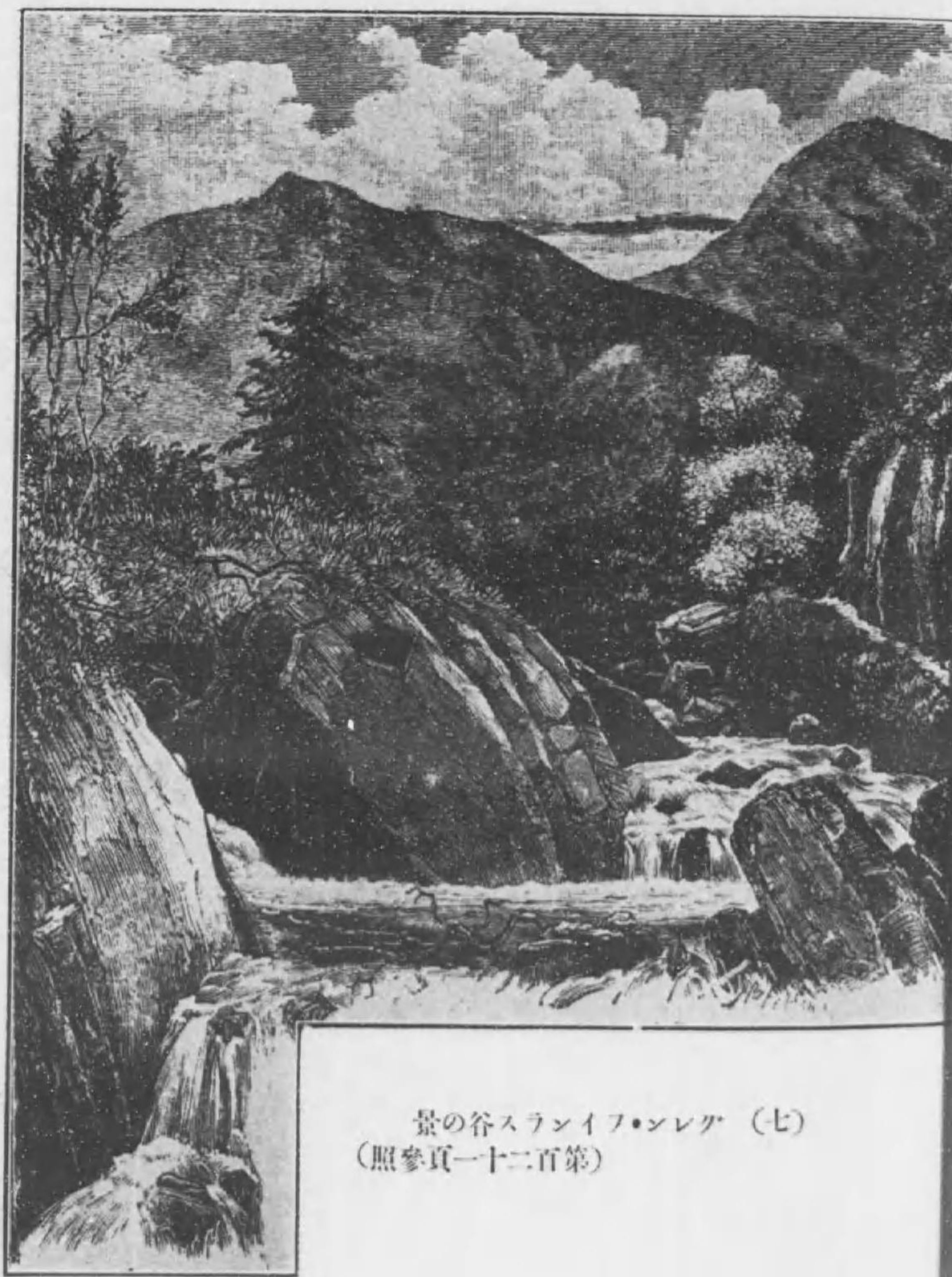
併し 此の青年と 彼の不正に對する憎悪や

正義に對する熱誠とを最もよく知つてゐる友人達や

また 昔の英雄の物語を聞いて燃え立つ時の

彼の大膽な面貌を知つてゐる伶人達は





景の谷スランイフ・ンレグ (七)  
(照参頁一十二百第)

この青年が大人となれば、

この山國ヤマクニに於けるロデリク・ドウの名聲も

迎むかも長く第一流の位置を保つことは出来ず、

マルコム・グレイムの名聲に場を譲るだらうと云つてゐた。

(\*『高地』の會長等は普通の姓名、渾名、稱號等の他に、更にその人の個人に特有なる——その人の特性をよく現はせる一種の渾名を有するを普通とす。此處に出でしドウ(Dun) (黒き)の如きはその一例なり。)

## 二十六

やがて彼等は小島をさして湖上を漕ぎ戻つた、

その時、エレンは『ねエ、阿父様』と云つて、

『何故こんなに遠い處まで狩りをなすつたのでせう？』

また、何故こんなに遅く歸つていらつしたのでせう？、そして何故……』



その後には彼女の意味ありけな眼差が語つた。

「これ エレンや、なる程俺は遠い所まで狩りをしたよ、

しかしこれは立派な戦争の真似なのぢやから、

この壯快な娯樂さへもなくされては、

ダグラス家の仕事として 特色として跡に残るものは

丸ツきり無くなつて了ふ譯ぢやから喃。

俺は 東へ東へと遠く彷徨ふて行く内に

グレン・フィンラスの森の中でマルコムさんに出會つたのぢや。

(\* キヤトリン、アクレイ、グエナハ湖地方の稱な  
るツロサクスの西北にある谿流、或は谿谷)

しかし 危険な處まで彷徨つて行つたもので、

そのあたりには到る處 徒歩や騎馬の狩人達が獲物を追ひ廻してゐたのぢやから、

この人は まだ王様から御後見の身ぢやけれど、

(領主が幼児を残して死し、正當なる後見者なき時は、その子  
供の成人するまで、國王が其の子、並びにその領地を後見す)



吾が命と 領土とを賭して、俺の護衛者となつて、  
森の中の種々な路を通つて 俺を案内して、  
追手に跡をつけられないでもなかつたが、  
兎に角 無事に連れて来て下すつたのぢや。  
だからロデリクも このダグラスのために興怨を棄て、  
マルコムさんを快よく迎へてくれるぢやらう。  
さすればこの人は俺のために又何か危険な目に逢はないやうに、  
ストラス、エンドリク(ロオモンド湖の東南端に  
流れ入る小流に沿へる谷)の方へ行く筈ぢやから。

二十七

彼等を迎へに出て来たロデリクは  
マルコムの姿を見ると顔が赤くなつたが、

しかし その振舞にも 言葉にも 眼附にも  
款待を裏切るやうな點は少しもなかつた。  
彼等は談話や 娛樂をしながら  
夏の日の午前を過ぎた。  
處が 正午に輕裝した使者がやつて来て  
ロデリクと何やら密談を交へたが、  
彼の顔色の陰鬱になつたのによつて  
齎らされた報知の凶い事であることが判つた。  
彼は深い物思ひに頭を悩ませてゐるやうに見えたが、  
主客の晩餐は模の如くに済まされて、  
それが済むと、彼れは 爐火の周りに 母親と  
ダグラスと  
グレイムと、なほエレンをも召び寄せて、  
それから彼れはあちこちと見廻し、



次には床をぢつと見詰めて、  
不快な話を出来るだけ聞き好いやうに云ひ現はす言葉をば  
頻りに考へ出さうとしてゐるやうに見えた。  
彼れは長い間短刀の柄をいぢくり廻してゐたが、  
とうとう傲然と額を上げて かう云つた。――

二十八

「簡単に申しますが、――それに巧言を弄する時でもありません。  
また私の朴訥な氣質として 甘く云ひ繕らうことも出来ませんから、――  
親戚の方であり、また――若しかう云つてあなたをお呼びすることを、  
このロデリクにお許し下さるのならば――父上であるダグラス様よ、  
お母様よ、エレンよ――コレ、従妹や、

何故お前は僕から眼を反けるのだ？――

それから、グリム君よ、――僕は、君が成人して、  
自分の領地を自由に出るやうになつた時に、  
僕の尊い味方となるか、それとも又敵となるかは  
間もなく判ることだらうと思つてゐるが。  
皆さん、聞いて下さい、――暴逆非道な蘇格蘭王は、  
王に敬意を表して、犬や 鷹を連れて、  
王の森の狩りに加はうとして馳せ参じた國境（イングランドとスコツ）の酋長達を  
鹿を食にかけらうやうに 無慙にも欺き殺し、  
また國王を迎へやうとして 饗宴を調へ、  
忠實に吾が城門を開いて待つてゐた酋長達をば  
彼等自身の城門の梁で酷らしくも絞罪に處して、  
傲然と 國境を征服したと號してゐるのであります。



それがために 復讐の叫びは メガトの牧場からも  
嶮しいヤロウ川岸からも ツイード河畔からも

エトリクの寂しい流れに洗はれてゐる處からも

銀色のチヴィアートの川岸からも 高く唱へられてゐるのであります。

(メガトの牧場はメガト河畔にあり、メガト川はヤロオ川の支流にして、ヤロオ川は又エトリク川に注ぎ、エトリク及びチヴィアート兩川は各々ツイード流の支流なり。ツイード河は英、蘇兩國の境を流るゝ大河。)

勇ましい部族の駈け廻つた谷々は

今は唯だ荒れ果てた 廣い牧羊地となつてゐます。

この不信不義で 殘虐非道な人として知られた蘇格蘭の暴君は

今や此方へ向つてやつて來るのであります。

彼れは同じく森の狩と詫言けてゐますけれども、

その目的が依然として同一であることは明かであります。

『高地』の豪族達に何んな有り難い仕合せが降つて來るかは

國境の酋長達の運命を見れば判りませう。

のみならず、ダグラス様よ、あなたの御姿は

グレン・フィンラス(廿六節第十 二行を見よ)の木の間で 敵に見られましたよ、

これは 私の間諜の確かな偵察によつて判つてゐるのであります、

兎に角私は、今申上げたこの難境に對して

あなたの御意見をお伺ひ致したいものであります。』

## 二十九

エレンとマアガレットとは恐れ戦きながら

互ひに慰藉を求めやうとするやうに、眼と眼とを見合はし、

それから各々生色のない眼差を

一人は我が父親の方に、一人は我が子の方に向けた。



マルコム・グレイムの凛々しい顔も

頗りに青くなつたり 赤くなつたりしたが、

彼の恐れてゐたは單にエレンのためであつたと云ふことは  
その眼差が明かに示してゐた。

その間にダグラスは 悲しさうではあるが、

落着いた口調で かく自分の意見を述べた、――

『勇敢なロデリクよ 嵐は如何に烈しく荒れ狂はうとも、

それは單に雷鳴だけで 害もなく通りすぎて了ふぢやらう。

また俺とても 無益に此處に留まつてゐて、

お前の家に稻妻を導くやうなことは決してしないよ。

お前もよく知つてゐるやうに、俺のこの白髪頭には

王様の電撃は最も烈しく下つてゐるのぢやから。

しかし お前は俺と違つて 王様の御命令次第に

自分の一族をひき連れて 王様をお助け申すことが出来るのぢやから、

柔順と恭謙とを表し 臣服を誓ひさへすれば、

王様の御怒りを免れることが出来るぢやらう。

しかし ダグラス家の憐れな残骸である

このエレンと 俺とは此處を離れて、

遠く何處かの森の中に隠れ所を求めて、

人に追はれた鹿のやうに、山にも、林にも

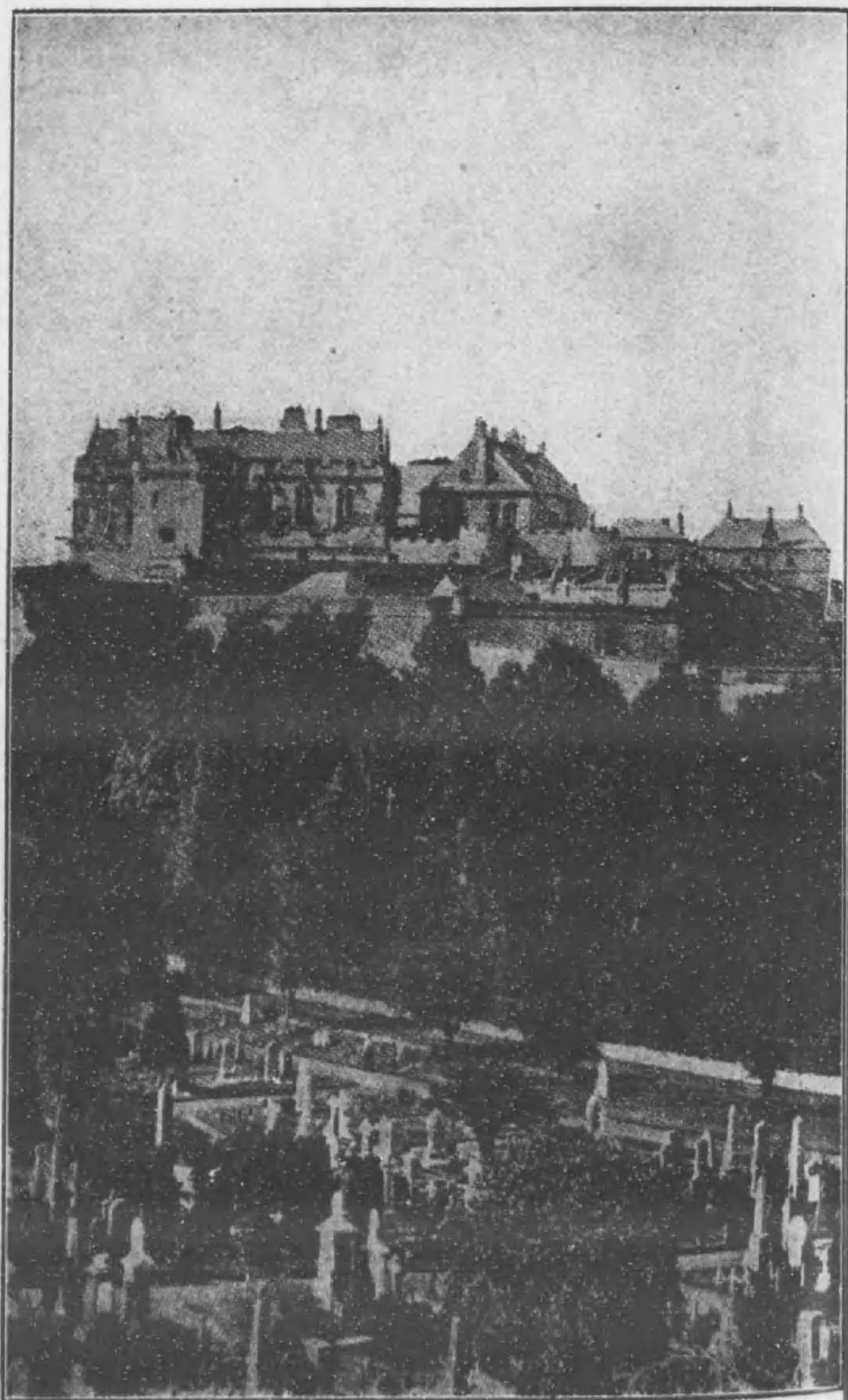
烈しい追跡がすつかり終つて了ふまで、其處で住まはう。――

### 三十

『いゝえ、私の名譽にかけて 左様な事は致させません！』と ロデリクは云つた。

『神様も此の決心をお助けなさつて下さい、我が忠實な剣も！』





(八) スターリング城の景

(第百三十一頁、二百六十二頁、三百二十六頁、其他参照)

左様な事は夢にも致させません。

若しもダグラスの御一族をば

危険の際に保護することが出来ない位ならば、

我が父上、並びに私の紋章である、あの古い『松』も、枯れ失せて了へ……

そこで、私のぶちつけな言葉をお聞きなさつて下さい、——

どうぞこのエレンを私の妻として下さつて、

あなたは御意見を以つて私をお助けなさつて下さい。——

若しもダグラス様がこのロデリク・ドウと同盟して下さいれば、

味方や同盟軍は群が<sup>む</sup>つて馳せ参<sup>ま</sup>じるでせう。

何故と申すに、西方の酋長達は

皆な私達と同じ疑惑と不安と悲痛とに沈んでゐるので、——

この同じ理由から、總て私達に力を合はすに極まつてゐます。

笹の音が高く私の結婚を知らせる時には



フォース河畔には、葬の鐘となるでせうし、

スターリング(フォース河に臨める町にして、蘇格蘭王の宮城あり)の城門を護る番兵達を驚かすでせう。

そして私が結婚式の篝火として火をつけた幾百の村の火焰は

ヂェイムズ王(蘇格蘭王)の夢を驚かすでせう。

——コレ、エレンや、そんなに恐れ縮かまらなくてもいよよ、

またお母様、どうぞそんなに私の話の邪魔をなさらないやうにして下さい。

これは唯だ私が感情に任せて云つてただけなんですから。——

若し賢明なダグラス様の御力によつて、

總ての山國の氏族と親しく同盟を結び、

彼等が銘々我が領土の山路を守りますれば、

王は目的を達せずして、空しく路のない谷間から

這々の體で再び都へ逃げ歸るでせう。

さすれば吾々は敵地に侵入する必要も、戦を交へる必要もなからうと思ひます。』



夜中に睡眠中に(夢中歩行病から)、  
 眼の眩ふやうな高塔に昇つた人が  
 絶え間もなく 轟き渡る大海の上に  
 突き出てるる 塔の縁に横たはつて、  
 眼さめることもなく 恐ろしい夢を見通して、  
 やがて朝日の光にふと眼を醒まして、  
 そのぎり／＼した光輝に眼を眩まされ、  
 驚いて ふと下の方を見おろし、  
 周りの測り知られぬ深さを眺め、  
 また歇む間もない大洋の轟きを聞き、

更に 風に吹かれる蜘蛛の巢のやうに揺めいてゐる  
 高塔の鋸壁の非常に脆弱なことを思つた時に、――  
 その人は 感覺の眼眩めく動亂のあまり、  
 我が身を眞逆様に下に抛け落して、  
 我が恐怖の豫示した一番恐ろしい運命に逢はうとする  
 絶望的な衝動を感じはしないだらうか？  
 丁度それと同じやうに エレンも 心は惑亂顛して――  
 一家の滅亡が不意に四方から身に迫つて來たことを知り、  
 父親を思ふ恐怖と 我が身を思ふ恐怖との衝突に  
 心はばら／＼になる程惱亂し、  
 殊に父親を思ふ恐怖の念が一層大きかつたので、  
 吾が身を犠牲にして ロデリックと結婚して、  
 父親の身の安全を買はうとする



絶望的な思ひを殆ど退けることが出来なかつたのである。

三十二

かう云ふ恐ろしい意圖を マルコムは

エレンの戦く唇と眼とに見ることが出来た。

其處で思ひ切つて立ち上つて、何か云はうとしたが、

自分の不安をまだ口先に出さぬ前に、

ダグラスは 死と生とが其處に相争つてゐるやうに見える

我が娘の 熱病患者のやうに激しく變化する頬の色を――

熱した血潮が 烈しく逆上するかと思へば、

また忽ちさつと退き去つて、その跡には

土色のやうな青ざめた色を残す彼女の頬を認めたので、

「ロデリクよ、もうよし よし」と 彼は叫んで、

俺の娘はお前の花嫁とすることは出来ない。

彼女が顔を根めたのは男に對する戀の印でもなく、

また彼女が顔を蒼くしたのは處女の恐れのためでもないのぢや。

いや、そんな譯のものぢやない――どうかあの娘は宥してやつてくれ、

また俺達を救はうとして、冒険をすることも止してくれ。

このダグラスは 王様に對しては

決して謀叛の軍を起したくはないのぢや。

王様がまだお若かつた時に 王様に馬を御したり、

劍を使ふ術をお教へ申したのは この俺なのぢや。

俺は今でも尙ほ昔の若い皇子を見るやうな心持がする。

俺は寧ろエレン以上に王様を誇りとし 歡びとしてゐたのぢや。

俺は 王様の御疳癪と姦臣どもの讒言によつて、



このやうに虐待されてはゐるけれども、  
なほ王様に對する愛情は變らないのぢや。  
どうか俺と利害を共にしなければ、  
他の方で容易に得られる恩惠(國王の恩惠)を求めてくれ。」

三十三

ロデリクは部屋の中を二度ばかり歩き廻つた。  
揺めく 廣い 格子縞の羅紗の上衣と  
傷けられた慢りが 怒りと 失望と相争つてゐる彼の顔顔とは  
炬火の陰鬱な光りに照らされて、  
丁度 旅の途中に日が暮れた巡禮者の途上に  
黒雲のやうな翹を卸してゐる

夜陰の悪魔のやうに彼の姿を見せた。  
あゝ報はれない戀よ！ お前の抛槍は  
その毒刃を彼れの胸元深く深く刺し込んだのだ。  
それで ロデリクはその堪え難い痛手に苦しみながら、  
とうとうダグラスの手を握りしめたが、  
以前には泣くことを知らなかつた眼も  
今は悼ましい涙の露に充ちあふれた。  
長く抱いてゐた希望のあえなく消えたと云ふ死ぬ程の苦痛に  
彼の廣い胸も張り裂ける程であつたが、  
自分の高慢な心で以てそれを抑へやうと努めたので、  
胸を包んだ縞羅紗は痙攣けるやう上下し、  
同時に 彼れの歎息は——満座寂として聲なかつたよめに  
悉とく部屋中に明かに聞きとれた。



息子の絶望と 母親の悼々しい顔附とには  
優しいエレンも 傍で視てゐるには堪へ兼ねた。  
そこで彼女が立ち上ると、それに手をかさうとして  
マルコム・グレイムが彼女の側へやつた來た。

### 三十四

すると ロデリクは跳びのくやうにダグラスの傍を離れた。  
丁度火花が 黒煙を通してぱつと燃え上り、  
長く 暗く 沈鬱に巻き上る煙に傳つて、  
一つの眞赤に燃え上る 廣い火焰となるやうに、  
深い 深い絶望の苦惱は  
忽ち凄まじい嫉妬の焰となつて燃え上つた。

彼は頑丈な手で マルコムの胸倉と

帯を纏つた碁盤縞の外衣とをつかんだ。

「退れ、青二才！」と 彼れは嚴しく云つて、

「退れ、にやけ男！俺が近頃貴様に教へてやつたことを

これ程までに無にするか？

この家と 伯父様と あの娘とに免じて

今日まで貴様を懲らすとを延ばしてやつてゐたのを有難く思はなくちやならんだ。

すると グレイムは 獲物に飛びかゝる獵犬のやうに

猛然とロデリクに組みついた。

『この腕が俺の身を守れない位なら、

俺の名譽も亡びて了へ！』と彼は叫んだ。

かうして二人は烈しく争ひながら、

めい／＼死物狂ひになつて 短刀 或ひは劍を搦んだ。――



若しダグラスがすぐ立ち上つて、巨人のやうな力で以て  
争ふ二人の間に割り入らなかつたならば、

必ず何方か一方が命を墮しただらう、――

『コレ 止さぬか！ 何方でも前に切り掛つた者を  
俺は自分の敵と見做すから、さう思へ。――』

狂人よ、この狂氣じみた喧嘩を止め！

一體これは何と云ふ態ぢや！ ダグラス家は

その娘の體をかう云ふ卑しい喧嘩の褒美とするほど、

そんなに墮落してゐると思ふのか？』

二人は 今更身を恥ぢて、必死に掴み合つてゐた手を

むつとしながら そろ／＼と離したが、

なほ 足を踏み出し、劍を半ば抜きさしたまゝ互ひに相手を睨み合つてゐた。

三十五

しかし 未だ劍が高くひらめかない内に、

マーガレット夫人はロデリクの外套にすがり付き、

マルコムは 夢魔を見て顔へ叫ぶやうな

エレンの魂消る叫び聲を耳にした。

それからロデリクは刀を鞘に抛け込み、

憤怒の情を嘲りの言葉に包んで言つた――

『明朝まで安心して此處に留つてゐるが好い。

君のやうなのつべりした頬を夜更の風に當てるのも氣の毒だから！

歸つたなら、チェイムズ王に云ふが好い、――

ロデリクは湖水や 山を守り固めて居ると。



また俺は自由の身と生れた自分の一族を引き俱して、

同じ人間の王の威を虚飾<sup>かさ</sup>る御家來衆の仲間入りはしないと云へ、

また王がアルピン族の事をもつと知りたいたと云へば、

君は十分我が軍勢や通路のことを教へることが出来るだらう。』

それから——『ヤイ、マリクス！』と叫ぶと、彼の腹心の扈從が這込つて來た。

(Henchman高地の會長の一種の扈從にして補佐役、危急の場合には主君のために死する覺悟あり。宴會の時、又は會長が他人と談話を交ふる時など、その後ろに立ちて警戒する役をすな)

『マルコム君に自由通行券を差し上げてくれい。』

すると若いマルコムは大膽に落着き拂つて答へた、——

『君の大事な砦<sup>とりで</sup>のことは何にも心配するな、

天使が一度恵みを垂れ給ふた土地ならば、

たとへ盜賊共が其處に出没しやうとも尊さには變りはあるまい、

君のけち臭い禮儀は僕には眞平<sup>まっぴら</sup>だから、

君の敵になそのを怖<sup>おそ</sup>がるやうな人に與るがい。

僕には山路は夜中も日中と同じやうに安全だ、

たとへ一番勇敢な手下<sup>あしもと</sup>を後に從へて、

ロデリク自身が僕の路を圍まうと安全だ。——

勇ましいダグラス様、優しいエレンよ……

いや、私は此處で別れの挨拶は何も申しますまい。

このマルコムがあなた<sup>がた</sup>方にお逢ひすることの出来ないやうな

そんなに祕密な寂しい谷間<sup>たにま</sup>はこの世の中にはありますまいから、

ロデリク君！いづれ君ともまた逢ふことがあるだらう。』

かう云つて、彼は森の中の隠れ家<sup>が</sup>を去つた。



アラン老人は岸邊まで彼を見送つて行つた。

(それはダグラスの命令であつたからだ。)

そして樂人は 明朝になれば嚴しいロデリックが

山や 野原や 谷間や 澤地に

『火の十字架』(第三篇、第一節の) を持たして廻らすと云ふ事や、

またその合圖を聞いて馳せ集まる人に逢ふのは

グリイムに取つては非常に危険であるので、

湖水のつと向ふの處に上陸するのが一番安全であるから、

アラン自身がその岸邊まで舟を漕いで行きませうと云ふやうなことを

心配さうにマルコムに話した。

しかしアランの注告は何のきゝめもなく、

マルコムは 老人の言葉を風と受け流して、

短刀と 合財袋と 測力とをば

廣い外套でぐるぐると固く巻いて、

湖上を泳ぐに都合の好いやうに

袖と 裾とを捲り上げた。

### 三十七

それから彼れはだしぬけに老人に言つた、――

『忠實の模範のお老爺さん、これであばよとしやう』――

彼は樂人の手を優しく握りしめて、――

『あゝ僕が安全な場所を教へて上げることが出来るといふんだけれど！

僕の領地は今 王様から御後見を受けて居り、

僕の家來は伯父様が治めてゐられるのだ。

我が敵を懲らし、我が味方を助けるには、



僕には唯だ自分の眞心と 劍としかないので。

けれども我が一族の族長を愛してゐる

ただ一人の忠實なグリーム家の者がある以上は、

このダグラス様を 追手に追はれた鹿のやうに

何日までも山奥の隠れ家の中にお住はせ申すことはしないから。

また あの驕慢な盜賊(ロデリックを指す)が小癪にも……、

いや、そのあとはいふことは出来ない。

黒奴のロデリックに云つてくれ、

俺は彼奴には爪の垢程の恩義を受けてゐないと。――

向ふの山の麓まで船で乗せて行つて貰ふ

極く小ほけな好意さへも受けてゐないと。』

かう云つて 彼れは惶めく水中に飛び込んで、

波の上に大膽に頭を持ち上げながら

湖畔から勢よく身を進めた。

アランは 不安さうに瞳をこらして、

湖上を遠く泳ぎ進んで行く青年の姿をすかし見てゐた。

泳ぎ手は 月光が銀色に輝かす

小波を暗く横切りながら、

鶉が水上を切つて進むやうに速かに

頻りに勢よく四肢を動かしながら進んだ。

それから月光を浴びた谷間に上陸すると、

其處から無事上陸したことを聲高く叫んで知らせた。

樂人は その遠い合圖の叫び聲を聞くと、

安心して、喜ばしく岸邊を去つた。



## 第三篇

### 氏族の集合

二

時は絶えず旅を續けて行く。吾々が嬰兒の時には

その膝にのせて吾々をあやし 揺ぶり、

子供の時には 海山での 彼等の澤山の珍らしい冒険談や

面白い話をして 吾々を驚かせた あの昔の人々の

世の中から どんなに消え失せてゐることであらう！



また、湖<sup>ミヅ</sup>び衰へ、力なく、坐<sup>ま</sup>礁した難破船のやうに  
『永遠<sup>とこしへ</sup>の闇黒』の海邊<sup>うみべ</sup>に佇みつゝ、嘆<sup>なげ</sup>れ聲を上げて寄せ返して来ては、

彼等を見へない處へ拂ひ去つて了ふ死の大波を待つてゐる人の  
どんなに少ないことであらう！ あゝ時は絶えず旅を續けて行く。

しかし山國の酋長がその號角<sup>ウツバ</sup>を吹いた時に、

野も 山も 森も 谷も 絶壁も

寂しい曠地<sup>くわうち</sup>も その合圖に答へ、

またその警報號角<sup>ウツバ</sup>の鋭どく響き渡つた時に――

彼等の一族の旗<sup>はた</sup>が空高く翻つた時に、

同時に軍の風笛<sup>ふうふえ</sup>が轟々しく集合の曲を鳴り響かし、

『火<sup>ヒ</sup>の十字架』が 流星のやうに 閃めきつゝ走り廻つた時に

忠實な一族郎黨<sup>いちじやうたう</sup>が逸散<sup>いつさん</sup>に酋長の許<sup>もと</sup>へ駈けつけたことを

なほ 善く覚えてゐる人はあるのである。

（\* 高地の酋長が、ある不意の又は危急なる場合に氏族の者を召集する爲に用ふる合圖の十字架にして、先づ老山羊を殺し、細木を以て十字架を作り、その尖端を火に燻らし、それを山羊の血に浸す。而してこれを腹心の早飛脚に最も近き村まで持たせ行き、唯だ集合の場所を通告せしむ。さすればその村の長がそれを受取り、次ぎの村へ持ち行き、同じく集合の場所を通告し、順次之れを繰り返す、かくしてこの合圖を見れば、十六歳以上六十歳までの武器を取り得る男子は悉く武装して召集に應ずべきものにして、若しこれに反する時は『火の十字架』の表象せる火と劍との刑に處せらるゝ定めなりしと云ふ。）

二

夏の曙の光はキャトリン湖上に反映して、

その蒼ざめた面<sup>おもて</sup>を紫紅色に變へた、

そよ吹く西風は 優しく 靜かに

丁度今湖水の面<sup>おもて</sup>に接吻<sup>くちづけ</sup>し、そつと木立をふるはし、

嬉し<sup>うれ</sup>さうな湖水は、羞恥<sup>はにか</sup>んだ少女<sup>をとめ</sup>のやうに戰慄<sup>れんりつ</sup>いたが、



歡ばしさに盤を作つて笑ふと云ふ様ではなかつた。  
其の胸に映つた山々の姿は、  
亂れてゐるのでもなく、静まつて居るのでもなく、  
空想の眼に映つた未來の歡びのやう  
明るくはあるが、不確な姿で浮んでゐた。  
睡蓮は明けゆく光りの方に  
その華やかな銀色の花瓣を擡げ、  
寢床を離れた牝鹿は、露の玉に飾られながら  
芝地へと仔鹿を連れて行き、  
灰色の霞は山腹を漂ひ去り、  
急流はきらきらとその面を輝かし、  
軽い雲片の疎に散つた空からは  
姿は見えないが、雲雀が歡喜の歌をうたひ、

黒鶉と 斑鶉とは  
藪や 小林から朝の挨拶を交し、  
それに答へて 珠數掛鳩は  
平和と 安息と 愛の歌をうたつてゐる。

## 三

しかし如何なる平和な思ひも 安息の念も  
ロデリクの胸中に荒れ狂ふ嵐を鎮めることは出来なかつた。  
彼は鞘に納めた濶刀を手にしながら  
突然島の岸邊に立ち出で、  
昇る朝日を打ち眺め、  
苛立だしげに劍に手を置いた。